令和６年度

第 26 回
わたしの主張岩手県大会
発 表 文 集

主催：わたしの主張岩手県大会実行委員会
独立行政法人国立青少年教育振興機構

目　　次

1　はじめに …… 1
2　大会日程 …… 2
3　大会風景 …… 3
4　わたしの主張発表作品 …… 5

区　分	発　表　題	学　校　名	学年	氏　名
最優秀賞	あなたと共に	陸前高田市立高田第一中学校	3年	菅　野　りれい
優秀賞	語り継ぐ	宮古市立河南中学校	3年	淺　沼　いつき
	ハンデがあっても	一戸町立一戸中学校	3年	小　野　太　星
優良賞	障がいを見守る愛おしい日々	盛岡市立大宮中学校	3年	南　　沙　良
	心のバリアフリー	盛岡中央高等学校附属中学校	2年	宮　本　幸　奈
	未来に生きる、地域のためにできること	花巻市立東和中学校	3年	大　松　　天
入賞	今、僕がここにいる意味	盛岡市立上田中学校	3年	村　上　　陽
	スマートフォンでつくる未来	八幡平市立西根第一中学校	3年	松　浦　うのん
	大志をもって	紫波町立紫波第三中学校	3年	中　村　楓　花
	命を守る私の決意	北上市立和賀西中学校	2年	小　原　悠　斗
	扉を開いて共に生きる	奥州市立前沢中学校	3年	千　田　陽菜乃
	正しい選択	一関市立一関東中学校	3年	三　澤　愛琳和
	「You will be able to do it !」	一関市立川崎中学校	3年	伊　藤　沙　矢
	向き合う覚悟	遠野市立遠野西中学校	3年	宇　夫　萌　江
	今大切にしたいこと	釜石市立釜石東中学校	3年	小笠原　凛　華
	セカイを数学で見ると	田野畑村立田野畑中学校	3年	畠　山　　陸
	私の夢	洋野町立種市中学校	3年	南　　翔　斗

※　各賞受賞作品は地区順に掲載しています。

5　審査委員長講評 …… 23
6　各地区大会の開催結果 …… 24
7　審査要領 …… 28
8　第 26 回わたしの主張岩手県大会実施要綱 …… 29
9　わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者 …… 31
10　参考　「少年の主張全国大会～わたしの主張 2024～」入賞作品 …… 32

は　じ　め　に

第 26 回わたしの主張岩手県大会は、令和 6 年 9 月 19 日（木）に矢巾町田園ホールを会場に開催されました。この大会には、今年は約 4,500 名の中学生が参加し、県大会には、地区大会で選ばれた代表 17 名が出場しました。

この大会は、次代を担う中学生に、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、日常生活の中で感じたことや考えたことを発表する場を提供することにより、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力を身に付けるとともに、地域社会との関わりについて考え、行動する契機とするほか、多くの県民に中学生の考えや行動への理解を深めていただくことを通じて、子どもたちの健全育成の充実を期すことを目的として実施しているものです。

主張の内容は、日常生活や学校生活など、自分の身の回りで起こる様々な体験を通して、気づいたり学んだりした「生き方」、「考え方」などを訴えるものとなっており、瑞々しい感性と溌剌とした態度で、素直で中学生らしい思いが込もった主張は、どれも感動を与える素晴らしいものばかりでした。特に本年は、家族の障がいをテーマにした発表が多く、差別や偏見、戦争、震災、また、家族や友人とのふれあいや支え合う心や思いやる気持ちを描いた発表が目立ちました。

この発表文集から、その主張に込められたメッセージをしっかりと受け止めていただき、次代を担っていく中学生が何を感じ、考えているのかを知る契機としていただければ幸いです。

なお、本大会の最優秀賞受賞者の菅野りれいさんは、令和 6 年 11 月 24 日（日）に国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」において、努力賞を受賞しました。

おわりに、本大会を開催するにあたり、矢巾町、矢巾町教育委員会をはじめ、関係者の御協力とお力添えをいただきましたことに感謝申し上げ、巻頭のごあいさつといたします。

令和 6 年 12 月

わたしの主張岩手県大会実行委員会

第 26 回わたしの主張岩手県大会日程

日時：令和 6 年 9 月 19 日（木）13：00～16：30
会場：田園ホール
（矢巾町大字南矢幅 13-123）

1	開会のことば	わたしの主張岩手県大会実行委員会	門　脇　吉　彦
2	主催者あいさつ	わたしの主張岩手県大会実行委員会 (公社) 岩手県青少年育成県民会議会長	菅　野　洋　樹
3	歓迎のことば	矢巾町長	高　橋　昌　造
4	大会出場者紹介		
5	審査委員紹介		
	審査委員長	㈱岩手日報社論説委員会委員長	四　戸　　聡
	審査委員	ＮＨＫ盛岡放送局チーフ・アナウンサー	宮　島　大　輔
		(一社) 岩手県芸術文化協会会長	柴　田　和　子
		ガールスカウト岩手県連盟連盟長	長　畑　ルミ子
		岩手県中学校文化連盟会長	泉　澤　　毅
		(公社) 岩手県青少年育成県民会議副会長	五十嵐　のぶ代
6	主　張　発　表		
7	情報メディア講座		
8	成績発表並びに講評	審査委員長	四　戸　　聡
9	表彰（賞状）	わたしの主張岩手県大会実行委員会 (公社) 岩手県青少年育成県民会議会長	菅　野　洋　樹
	（記念品授与）	㈱岩手日報社論説委員会委員長	四　戸　　聡
10	閉会のことば	わたしの主張岩手県大会実行委員会	門　脇　吉　彦

開会行事

主催者あいさつ
岩手県青少年育成県民会議
菅野洋樹　会長

歓迎のことば
高橋昌造　矢巾町長

発表風景

閉会行事・表彰式

成績発表・講評
四戸聡　審査委員長

【最優秀賞】
陸前高田市立高田第一中学校３年
菅野りれいさん

【優秀賞】
宮古市立河南中学校３年
淺沼いつきさん

【優秀賞】
一戸町立一戸中学校３年
小野太星さん

情報メディア出前講座

テーマ：
「インターネットを安全・安心に使える力を身に付ける」

第 26 回わたしの主張岩手県大会出場者　発表作品

（原文のまま掲載）

※　縦書を横書としたため、漢数字の一部を算用数字に置き換えました。

最優秀賞

あなたと共に

陸前高田市立高田第一中学校　３年
菅 野　りれい（かんの・りれい）

「眼鏡と一緒。なんにも変わらないんだ。」
そう話す父の笑顔を私は忘れることはないでしょう。

私の弟は足に装具をつけて生活しています。そのことは私にとって日常であり、とりたてて考えることではありませんでした。でも、一度だけ父に尋ねたことがありました。すると、父は「目が悪ければ眼鏡をかけて見やすくする。体のどこかに不都合があれば、必要な道具を使う。眼鏡と一緒。なんにも変わらないんだよ。」と言いました。父のその言葉が私の心にストンと落ち、今でも私の中の芯となっています。

「眼鏡と一緒。」――だから私は、車椅子の人を見かけても、装具や道具が必要な人と出会っても、それを特別なこととは考えませんでした。そうあの日までは。あの日、私が街で見かけたのは、装具をつけて歩いていた男性。そして、その姿を真似て笑っている人たちでした。父の笑顔とはほど遠い、その笑い顔を見て心が締め付けられました。しかし、その人にとっての当たり前に対して、偏った見方をしているのは、なにも大人ばかりではありません。学校生活の中でも友達を揶揄して心ない言葉を吐く人もいます。

だからこそ、私は皆さんに聞きたいのです。「障がいを持っていることはいけないことですか。」私はそうは思いません。様々な事情を抱えているのは誰もが一緒。障がいも、それぞれが持つ個性の一つだと思うのです。人は誰でも自分と違うことに敏感に反応します。私たち中学生はなおさらです。でも、だからこそ「違い」を認められる「しなやかさ」が必要なのではないでしょうか。

違いを感じること、また、その違いに「なぜ？」と問うことも自然なこと。しかし、それを言葉や態度に表すことは違うのではないかと思うのです。モヤモヤとした気持ちでいるとき、ある新聞記事が目にとまりました。海外で博物館のガイドをしている方の話で、「幼いころは肌の色や、文化の違いなどで相手や友達を選んだりしません。相手を好きになって仲良くなるし、心の壁が低い。」「そう！」私は思わず声をあげていました。幼い子も「違い」には敏感です。そして、実にストレートに「どうして？」と問います。けれども、その後は「違い」に目を向けるのではなく、その人自身を見つめます。しかし、大人になるにつれ「違い」ばかりに気をとられ、その人の本質を見ようとしなくなります。

私が住む陸前高田市は「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」を掲げ、障がいのある人もない人も、若者も高齢者も、誰もが快適に過ごせる社会の実現に取り組んでいます。私は、この取り組みの実現を心から願っています。けれども、この取り組みを知り、意識している人が一体どれ程いるでしょうか。自分には関係ないことと、決めつけるのではなく、無関心という心の鎧を脱ぎ捨て、知ることから始めてみませんか。そして、それぞれの「当たり前」を尊重し、「私なら」と自分のこととして捉え、その考えをつなげる社会にしていきたいのです。

装具、車椅子、私たちは実に多くの必要なものを生み出してきました。私はその全てが「眼鏡と一緒」となる日を作っていきたいと思います。あなたと共に。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

普段の生活でも、装具などの道具を使っている人を見かけることがあります。私の家族にもいるので当たり前のことだと思っていました。しかし、一般的には、そのようなことに対する知識があまりないことが分かりました。友達にも「実際に会ったことがないし、知る機会もあまりない。」と言われ、私の主張で「知るきっかけになってもらえればいいな。」と思い、この作品を書きました。この主張を聞いて、多くの人に理解していただけたら嬉しいです。

優秀賞

語り継ぐ

宮古市立河南中学校　３年
浅 沼　いつき（あさぬま・いつき）

ひいおばあちゃんが亡くなった、という知らせを聞いたとき、私は、ひいおばあちゃんの「戦争はだめだぁよ」という言葉を思い出していました。私に、戦争を体験した生の声を聴かせてくれたひいおばあちゃん。大きな喪失感と共に、戦争を語る人がまた一人、いなくなってしまったのだ、と思いました。

私は、戦争を知りません。私の母も、私の祖母も知りません。私にとって戦争は、教科書の中の、遠いお話でした。けれどあるとき、「この世界の片隅に」という物語を読んで、戦争がこんなにも民間人である私たちの近くにあったのだ、と知り、衝撃を受けました。それから私は、もっと戦争について知りたくなり、様々な本を読んだり、戦争に関わる映像をみたり、戦争経験者であるひいおじいちゃんやひいおばあちゃんに戦争の体験をきいてみたりしたのでした。中学生だったのに勉強をさせてもらえず、戦争に行く訓練や畑仕事をさせられていたこと。お兄さんに赤紙が届き、戦争に出発していったこと。今の私と同じくらいの年の人も否応なく巻き込まれ、辛い思いをしていたことを感じました。ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんは、口癖のように「戦争はだめだあ」と言います。この一言に、体験した辛さや、私たち子孫にそんな思いをさせたくないという気持ちが集約されていると思いました。

今年は、太平洋戦争が終わってから 79 年になります。戦争を体験した人たちは現在、全人口の 0.5 パーセント以下しかいないそうです。体験を語れる人がいなくなっていく今だからこそ、私たちが自分たちの子孫に伝えていかなければならない、と強く感じます。経験している人としていない人の間には、大きな隔たりがあるのかもしれません。けれど、知ろうとする努力によってその隔たりを縮めることができると思います。

７月に、校外学習で釜石市の鵜住居地区に行ってきました。東日本大震災当時中学生だった方が、学校から避難したときの話を聞きながら、実際に避難した道を歩きました。その話の中で印象的だったのが、「先生に指示される前に生徒だけで避難し始めていた」ということです。津波が来るとわかっていたわけではないのに、津波を一度も経験したことがないのに、まるで津波がくることを知っていたかのような迅速な動き。これは過去の津波の教訓が鵜住居でずっと伝えられ、子どもたちにも浸透していたからに他なりません。語り継いでいくことの大きな力を実感する出来事でした。語り部さんは言います。「震災の記憶がない君たちにこそ、語り継ぐという意識を持ってほしい。でないと、どうしても途切れてしまう」と。私の中に、「語り継ぐ」という使命感がよりはっきりと浮かび上がってきたのでした。

戦争や震災の教訓を個人個人で語り継いでいくことの意味を、私はこう考えます。まず、その出来事を他人事ではなく自分事としてとらえられる、ということです。教科書や資料ではどうしても伝えきれない生の声を、私たちが伝えていくことに大きな意味があります。次に、その悲惨さ、怖さを伝えることにより、安易に間違った選択をする人が減ることです。その出来事の記憶が人々の中から消えていったとき、軽い気持ちで選択をして、後悔する状況になる危険が高まると考えます。

私だけでなく、多くの人に語り継いでもらうために、私にできることは何かを考えました。まずは、私自身がもっと知ること。家族や友だちと、戦争や震災について話すこと。そして、小さいころから続けている演劇を通して、生の声を伝え続けていくことです。戦争や震災を題材とした作品を見てもらうことで、それを知らない世代の人が少しでも興味を持ち、知ろうとするきっかけを作ることができたらとてもうれしいです。

８月 15 日。防災無線から流れる鐘の音に合わせて黙とうをしながら、私は心に誓います。「ひいおばあちゃん、おばあちゃんの気持ちを、私が絶対に後世に伝えていくよ。」

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、戦争や震災を知らない人に、この主張を届けたいです。戦争や震災を遠い世界のことのように感じている人はたくさんいると思います。私もかつてはそうでした。しかし今は、戦争や震災を語り継ぐことの意味を、自分なりに見つけることができたと思っています。戦争や震災を経験したことがない人にこの主張が届き、少しでも知ろうとするきっかけを作ることができたらとても嬉しいです。

優秀賞

ハンデがあっても

一戸町立一戸中学校　３年
小 野　太 星（おの・たいせい）

私には、3 歳上に姉がいます。その姉とは幼い頃よく遊んでいて、何の変哲もない、ごく普通の仲のよい姉弟でした。しかし、私が小学校に入学してから徐々に会話が減っていきました。それは、姉が周りの子と違うなと感じるようになったからです。どうして姉のクラスはみんなと違うのだろう。どうして学習する内容が遅れていくのだろう。そのような考えが大きくなっていきました。また、姉に対して少しでも強い言い方をしてしまうと、姉は所かまわず暴れてしまい、私は恥ずかしいという気持ちを抱えるようになりました。

姉は、知的障がいと広汎性発達障がいを持っています。知能、言語の発達が人より遅く、人との関わりが苦手なのです。スポーツが苦手、人前で話すことが苦手といったように人それぞれ苦手なものがあるはずです。その中には、それを病気として抱えている方もいます。それが姉です。私には、身近な人なのです。

そんな姉は、小学校の頃、いじめを受けるようになりました。授業では、グループに入れてもらえないといった仲間外れ、容姿を揶揄する言葉での暴力。私は当時、姉に対して恥ずかしいという気持ちから、姉と少し距離を置いていました。しかし、そんな私でも、そのようなことはあってはならないと感じていました。

実は、私はこの出来事と全く逆のことを経験しています。私は幼稚園の頃、場面緘黙症でした。場面緘黙症は、家では問題なく会話できますが、学校や幼稚園といった特定の場所では、自分の意思と関係なく、話せなくなる症状です。そんな私でしたが、クラスのみんなは、決して仲間外れにせず、仲良く接してくれました。そして、様々な人の支えで、私は今このように、大勢の人の前で話すことができています。人の支えの有無によって、大きな違いが生まれるということを、私は心のどこかで気づくことができました。

小学６年生になった頃、私は姉が通所していた施設で開催されていた「きょうだいの会」に参加するようになりました。この会は家族に障がいを持った人が集まる会です。母に誘われたことがきっかけで、正直なところ、最初はあまり乗り気ではなかったのですが、いざ参加してみると、とても良い会でした。色々な方の話を聞いていると、「物を投げたり引っ掻いてきたりするので大変なんですよね。」という話や「夜中に目が覚めると暴れて自分まで眠れなくなります。」という話もありました。私よりも苦労しているんだなと感じられることもありました。ある時、職員の方から「お姉ちゃんのこと、友達に言ったことある。」とたずねられました。私は「姉がいることは言ってるんですけど、障がいのことはあまり言ってないです。」と答えました。これは、周りの友達に姉のことを話したとしても共感を得られないからという考えがあったからです。

それから、私はこう考えるようになりました。健常者が障がいを持つ人に対し、平等に、あたたかく接することができれば、障がいを持つ人も気持ち良く生活することができ、また、どこまでも成長できるのではないか、と。さらに、この会への参加を通して、障がいを持つことは決して恥ずかしいことではない。間違いではないということを身に染みて感じました。姉に対して恥ずかしいと思う気持ちも薄れていきました。

私は将来、障がいを持つ人に視点を置いた、ＮＰＯ法人をつくりたいと考えています。現在の社会は、障がいを持つ方に対して手厚い支援制度がありますが、その分健常者と障がい者という区別がはっきりされている状況にあります。たとえ、障がいを持っていても美術の才能に富んでいる人、ものづくりが上手な人のように、それぞれ必ず長所を持っています。それらを発揮する場が身近な社会に必要です。そして、みなが平等に安心して暮らせるためには、一人一人の意識の向上が必要です。人として生きることの重さは、障がいのあるなしによって、少しも変わることはありません。だからこそ、誰に対しても公平に接しましょう。ハンデがあってもいい、ハンデがあっても幸せ、そう思える未来を、ともに創っていきませんか。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

家族に障がい者がいる人や自分の障がいに悩んでいる人に届けたいです。障がいをマイナスなものと捉えている人の方が多いと思いますが、私は逆です。世の中には障がいを自分の良さにしている人もいますし、それを受け入れて様々なことに挑戦している人もいます。障がいは自分を締めつけるものではないのです。その人の良さの一つであると思います。この主張を聞いて、そのような人が自信を持つことができれば嬉しです。

優良賞

障がいを見守る愛おしい日々

盛岡市立大宮中学校　３年
南　　沙 良（みなみ・さら）

車が走っている道路に向かって、突然走り出す恐怖の瞬間。家の玄関になぜか４つもある鍵。読んだ絵本が横一列で床に並ぶ謎の光景。部屋を出る時、大声で「バイバイ」と毎回叫び、意味もなくドアを開けたり閉めたり繰り返す不思議な「儀式。」このような光景を見たことがありますか。

これは、重度知的障がいを伴う自閉症の弟の日常です。現在 12 歳ですが、精神年齢は 2 歳弱程度です。簡単な単語で何かを要求することはありますが、会話は難しく、危険予測もできません。私たち家族は弟の命を守りながら、これまでずっと楽しく生活してきました。私にとっては当たり前で「愛おしい毎日」です。

私は小さい頃から弟の障がいについて両親から教わっていました。弟の通う幼児教室にも一緒に行きました。様々な障がいをもつ子供たちがいて、どの子も笑顔にあふれ、とても可愛らしかったです。

しかし、こうした光景がすべての人にとって普通ではないと知りました。私にとって「普通」だった世界は、小学校へ行き多くの人と関わることで、残念ながら「差別」のある世界へと変わりました。廊下を急に走り出した支援級の友達に「きも」と吐き捨てるように言う人や、「お前はこっちに来るな」と仲間外れにする人。私はそれらの光景を目にして、とても悲しく、そして腹立たしく感じました。

生まれた時から障がいのある人も、途中からハンデキャップをもつことになった人もいますが、誰もが願ってそうなったわけではありません。なぜ「差別的な感情」は生まれるのか。それは、突発的としか思えない不思議な行動や、永遠と繰り返してしまう行動などを初めて目にする人はどう反応すれば良いのか、困ってしまう。だから、障がいを笑い、からかったりする態度を取ってしまうのではないかと考えます。知らないことは悪いことではありません。知らないままにせず、知ろうとすることが大切ではないでしょうか。

障がいをもつ人は人一倍努力しています。私の弟も私たち家族にたくさんの感動や笑顔を届けてくれました。初めて「お姉ちゃん」と言ってくれた時。お水を飲んで「おいしい」と言えた時。みなさんにとって当たり前のことが、私たち家族にとっては「特別な出来事」になります。

私は、朝６時から誰もいない公園で遊ぶ楽しさを知りました。弟が買い物に行くと毎回同じアイスを買うことや、読んだ絵本を床に並べる姿だって案外楽しいことなのだと知っています。

無理解や差別的な感情を持つ人との溝を埋めるのは、障がい者の日々を知る「経験値」です。私が感じたユニークで愛おしい日々の出来事を多くの人に知ってもらえば、障がいは「かわいそう」ではなくなるのではないかと思います。

パソコンを開けば人工知能がなんでも答えをくれる時代ですが、それでも、自分自身で考えることが重要だと思います。人と人は互いに寄り添うことでしか、理解し合うことはできないはずです。ＳＮＳで心ない誹謗中傷が広がることがそれを証明しています。顔の見えない関係性になるからこそ、無責任な言葉をつづることができるのです。

ドアの開閉を繰り返す反復行動をばかにしないでください。あざ笑うのではなく、みんなで一緒にほほ笑み、見守るだけでいいのです。「障がい」を支える側と支えられる側に分けて考える事に私は共感できません。互いに「ありがとう」と言い合える関係になっていくことを願います。言葉だけではなく、心の深い部分で分かり合う差別のない世界へ。簡単に変えていけるとは思いませんが、私にできることを発信していくつもりです。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は今まで何年間も「障害のある人を笑わないでほしい」と思い続けてきました。インターネットで調べれば障がいについて知ることができ、障がい者を取り巻く環境も改善が進んでいますが、今もなお偏見や差別は残ったままです。障がいは悪ではなく、人一倍努力している人もいます。誰かに支えられて生きる人をあざ笑うのではなく、多様な生き方の一つとして認められる日を信じ、弟と過ごす楽しい日常を伝えたいと思いました。

優良賞

心のバリアフリー

盛岡中央高等学校附属中学校　２年
宮 本　幸 奈（みやもと・ゆきな）

「バリアフリー」という言葉を、どこかで耳にしたことがあるのではないでしょうか。

今でも、人種、肌の色、性別等のバリアがまだまだ残っています。

そこで「バリアフリー」は今どのように取り組まれているのか。また、真のバリアフリーとはどのようなものか、私なりに考えてみました。

私には、車いすを使用して生活している知人がいます。車いすは、本人が漕ぐことも後ろから誰かに押してもらうこともできます。車いすを押す立場になってみると、私が、普段何気なく歩いている道でも、小さな段差や傾きなどがあるだけで、車いすの方は通行しづらいことに気がつきました。

あるとき、私がその知人の車いすを押していると、小さな溝に車いすのタイヤをとられて彼の体は前方へ投げ出されてしまいました。彼は、私よりも体が大きかったため、車いすへ戻すのにかなりの力と時間がかかりました。そのとき、見ていた人が誰も声をかけてくれなかったのが、とても悲しかったです。

また、あまりに歩道が傾いていて、このまま車いすで進むのは危険だ、と車道で漕いでいる人も見たことがあります。このままでは、車いすの事故が増えるだけではなく、気軽に外へ出られなくなってしまうかもしれません。

それは果たして、現在の日本が目指す「バリアフリーな社会」なのでしょうか？

本来、私たちが目指さなければならない「バリアフリー」とは、道路の整備をきちんとするだけではありません。すべての人がお互いに気にかけあうことが、バリアフリー社会への大きな第一歩となるのです。また、体の不自由な人だけ、お年寄りの人だけ、というように困っている人に限定をせず、すべての人々に手を差し伸べられる社会に変えていかなければなりません。

しかし、具体的に何をしたらよいのか、なかなか想像がしにくいでしょう。

そこで、今からでも取り組み始められるような、事例をあげたいと思います。

まずは、声をかけてみることです。

わたしの知人は、「『どうしましたか？』や『私に何かできることはありますか？』と声をかけてもらえるだけでも、すごく救われる」と言います。何を手伝えばよいのか、相手が何に対して困っているのか、分からなくてもよいのです。断られるのを恐れずに、まずは挨拶をする感覚で話しかけてみてください。話しかけてもらえた方は、どんな立場でもきっと嬉しく感じるはずです。

また、車いすを使う人だけでなく、点字を頼りにして生活している人もいます。その点字の一つが、歩道などにある黄色い点字ブロックです。あの点字ブロックを使って目の不自由な方は歩いています。

しかし、わざわざ点字ブロックの上を歩いたり、荷物を置いたりする人がよく見受けられます。私は、常に思いやりを持っていることで、いざという時にも必ず誰かのためになると思います。悪気がなかったとしても、そのとき周りに目の不自由な方が居なかったとしても、自分がどうするべきか、私たち全員が、そのことを考えていかなければなりません。

車いすを使っている人、点字を使っている人に限らずすべての人に手を差し伸べ、自分が困ったときには「助けてほしい」と素直に言えるような心構えをするきっかけになれば、幸いです。

私たち全員が、思いやりを持つことで今生きづらさを抱えている人が少しでも少なくなれば良いなと思います。

最後までご清聴いただきありがとうございました。

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

嬉しいときや、感謝したいときは「ありがとう」と伝え、自分が間違ったときは素直に「ごめんなさい」と言える。また、言葉にしないと伝わらないこともあると理解して何気なく優しい声をかけあう思いやりある社会にしていきたいです。つまり、声をあげることによって、世界は変わるのです。大好きな祖父がいつも言っていた「誰しも、皆生かされている」という言葉を胸に生きていきたいです。

優良賞

未来に生きる、地域のためにできること

花巻市立東和中学校　３年
大 松　　天（おおまつ・てん）

皆さん、無人駅を利用したことがありますか。花巻市東和町にある土沢駅は無人駅です。以前は有人駅でしたが、利用者の減少に伴い無人駅になりました。

私が過ごしてきた東和町は明るく､活気があり、人の温かさあふれる街だと思っています｡しかし、今の土沢駅に行くと、人気がなく、薄暗く私は寂しさを感じました。

そんな時、私が所属する総合文化部で土澤アートクラフトフェアに出店することになりました。実は、土沢駅は宮沢賢治さんの「銀河鉄道の夜」のモデルにもなった駅です。

そこで私たちは、地元企業の協力を得て、銀河鉄道をモチーフに宇宙をイメージした背景を生地で作り、そこに部員達の作品を展示しました。ワークショップでは、東和の土や石、植物で作った絵の具を使って絵を描いてもらいました。

「この絵の具は、自分たちで作ったんですか」
「はい。東和町の土や石、植物で作りました」
「こんなきれいな色になる植物があるんですね」

普段、人気のない駅ですが、その時は県内外や外国人の方々と多くの人が訪れ会話を楽しみました。

訪れた方々の笑顔を見て、中学生でも東和町の良さを伝えることができると実感しました。

さて、皆さん、この数字は何を表していると思いますか。上は、平成 17 年 12 月合併前の和賀郡東和町の人口数、下は、現在の花巻市東和町の人口数です。２０年間で約３千人も人口が減少しています。

これは花巻市でも同じです。２０年後には、約２万５千人もの人口が減少するとの予測が出ています。

この数字を初めて知ったのは、総合学習の講話でした。初めは正直､「人口減少なんて日本各地で起こっていることで、大したことないでしょ」と思いました。皆さんの中にも私のように思っている人がいるのではないでしょうか。しかし、お話を聞いているなかで、自分たちの住む町、地域を守るために自分事として考える必要があるのだと思うようになりました。

私たち３年生は、今年度「未来に生きる～地域のためにできること～地域貢献・地域発信！」というテーマで、総合学習「東和創造学」に取り組んでいます。そこで、地域のつながりを作っていくために尽力している方々と一緒に､「東和棚田のんびりＲｕｎ」というイベント運営に参加します。

棚田Ｒｕｎは「競走」ではなく、自然と人の手が育んだ棚田道をのんびり走りながら、地域の人々と交流するイベントです｡東和の歴史､自然､文化に触れながら、人とのつながりも作ることを狙いとし、熱い思いを持って創られました。

運営者の菊池剛史さんは、東和町の課題は「少子高齢化に伴う人口減少」､「人口減少が進むと、地域のつながりが弱くなり、地域社会が維持できなくなってしまう。だから、人と人とがつながる場を創ることが大切だ」と話されていました。東和町には、剛史さん達のように、自分たちも楽しみながら独自の取り組みで、地域の将来を創っていこうという大人が多くいらっしゃり、頼もしく感じます。

これから、人口が減少していくことは、変えられないようです。それでも、私たちが大人になった時、地域の一員として人とつながり、地域活動を支えていかなければなりません。

「人口が減少する、地域に何もないと嘆く、そうではなく、みんなの思いが集まり、工夫があれば地域を元気にできる」

「楽しそうに活動している場所には、人が集まりアイディアが生まれる」

アートクラフトや棚田Ｒｕｎの取り組みを通して、私はそう思うようになりました。

東和中学校の合言葉は「やってみよう」です。これからも､「やってみよう」を合言葉に、同じ地域に生まれ、一緒に育ってきた仲間と地域を元気にしていきたいです｡そのために､「私たちにできることは何か」「私にできることは何か」を、これからも自分に問いかけていきます。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

総合学習の「東和創造学」を通して、将来人口減少により、地域社会が維持できなくなってしまうため、人と人とがつながる場を創っていくことが大事だということを学び、自分たちの街を大切に思う気持ちが芽生えたからです。街を盛り上げるため尽力してくださる方々と共にイベントに参加し、自分たちには何ができるのか？と考えるようになり、「やってみよう」を合言葉にチャレンジしていこうと思うようになりました。

入賞

今、僕がここにいる意味

盛岡市立上田中学校　３年
村 上　　陽（むらかみ・はる）

僕は生まれつき、足が不自由で、見ての通り、車いすで生活しています。小学校の頃は支援学級に所属しながら、普通学級の人たちと過ごしていました。しかし、体育の授業を受けることはほとんどできず、重い装具を付けて、廊下を往復するだけのときもありました。また、一緒に生活していく中で、他の人と同じように歩いたり、走ったりすることができず､「僕も思い切りみんなと動きたい」と思っていました。

そんなある日、僕はお母さんに
「僕はどうしてこんな体で生まれてきたの？」
「他の人が当たり前にできることができないのは嫌だ」
と打ち明けました。

すると母は、
「不幸と不便は違うんだよ。」
と言い、
「もし、あなたが今、みんなと同じように歩けていたら、今通っている学校の友達、先生に会えていなかったかもしれないんだよ。確かに、歩けなくて不便かもしれないけど、体が不自由だから、不幸だなんてことはないんだよ。」
と答えてくれました。その言葉は、自分には何もできないと思っていた自分に前を向くきっかけをくれました。

時は経ち、僕は今の学校に入学しました。中学校に入ってからは、クラスメイト、先生方に何度も何度も励まされました。

「陽くんならいけるよ！」
「大切な存在だからね！」
この温かい言葉たちが僕に自信をくれました。

僕は、気付きました。前を向くと可能性がたくさん広がっていると。できないと思って何もやらないことが自分の可能性を狭めていると。みんなが支えてくれたから、僕は前を向ける。そして、進めるということに。

そんな僕をさらに前進させてくれたのは、先輩方でした。倒れそうになるまで、声を枯らして全力で応援する姿。声量もハーモニーもレベルの違う合唱。読む人の心に届けようと学級の団結を表した新聞。誇りをもって取り組む姿は､「人はこんなにもできるんだ」と自分の心に火が点きました。

「僕も全力で何かをやってみたい」そう思った僕は、２年生の宿泊研修で応援リーダーをし、３年生では組団の応援委員として前に立ちました。

最初は「みんなと同じように応援をしたい」と思い、一生懸命応援をしていました。すると､「陽くんと一緒だと燃えるんだよな」と言って、仲間が傍に来てくれました。そのとき、いつも支えられていた僕も、仲間に力を与えることができていると実感しました。前に立って、みんなと応援できる喜び、全力で取り組める楽しさ、自分も誰かの役になっているという嬉しさ、前を向いたからこそ、気付けました。

みなさんは何かやってみたいことはありますか。

それを自分には無理だと諦めたりしていませんか。

今、僕がここにいる意味。それは、前を向いている限り、可能性があるということを伝えたいからです。皆さんには皆さんにしかないよさがたくさんあります。そのことを伝えるためにここにいます。何もできない自分が嫌いだと思う人、自信が持てない人、様々いると思います。自分もそうでした。しかし、下を向いていたら何もできません。前を向くと自分には気付けなかった可能性に出会えます｡全てうまくいくわけではないですが、少しずつ自信もついてきます。その気持ちがある限り､前に進めます｡それはきっとあなたにしか、歩めない道です。

身体が不自由だから､不幸だなんてことはない。今なら母の言葉の意味が分かります。不自由なことはあります。しかし、できることはたくさんある。自分はとても幸せだということ。たくさんの人に支えられてきたことへの感謝を忘れずに、僕はこれからも自分にしかない道を踏みしめていきたい。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

今回発表する作品にも書いたように､「何もできない」と思っていた自分に、前を向くきっかけをくれた母親、挑戦する自分の背中を押し、励ましてくれた学級や学年のみんな、先生方はもちろん、今日に至るまで僕を支えてくれたすべての人に、この主張を届けたい。また､「自分が好きになれない人」「自分のことが嫌いな人」「自信がもてない」と思っているすべての人に、自分のよさや、可能性に気付いてもらえたらいいと思う。

入賞

スマートフォンでつくる未来

八幡平市立西根第一中学校　３年
松 浦　うのん（まつうら・うのん）

皆さんは、身近にあるスマートフォンでトラブルに巻き込まれた経験はありますか。スマホは、どのように使うのが正解だと思いますか。

スマホは身近な人だけでなく、世界中の人と関わることができる便利な道具ですが、少しでも使い方を間違えると大変なことになります。間違った使い方をすることで、人間関係が壊れることもあるのです。

私は、自分とは違う学校の人とＳＮＳを通して友達になりました。同じ市内に住んでいるということもあり、相手の部活の練習試合などによく応援に行っていました。しかし、普段はお互いＳＮＳでしか話すことができません。そのため、お互いの気持ちが伝わらないことや、言葉の行き違いなどが何度もありました。このようなことが続き、ついに喧嘩になってしまいました。そして、相手から「縁を切ろう」と言われたのです。とても苦しく、辛い経験でした。相手を傷つけるつもりではなかったのに傷つけてしまったり、傷ついたりしました。便利で楽しいはずのＳＮＳを利用することで、苦しい思いをすることになったのです。

この経験から、私はＳＮＳの使い方、友達との向き合い方を改めて考えることができました。自分も含め、私の周りには危機感をもたずにスマートフォンを利用している人がたくさんいると感じます。ＳＮＳを通しての会話は、自分と相手の捉え方が違うだけで多くのものを失います。失ってから過去に戻ることはできません。ですから、スマホを通して会話する際には、しっかり考えて投稿し、返信するべきだと思います。スマホを使うのは楽しいですが、相手や自分を傷つけないように使うのが最も大切だということを忘れてはいけません。

今は子供からお年寄りまでスマホを使う人が増えてきています。スマホが一般的になったことで、被害を受けた人はたくさんいます。誹謗中傷やネットでのいじめで命を絶つ人さえいるのです。ネットでは簡単に「殺す」や「消えろ」などといった言葉を発信することができてしまいますし、匿名で書き込むこともできます。さらに、ＳＮＳは関係のない人まで巻き込むこともできるのです。

スマホは、今の時代に必要不可欠なものです。だからこそ、このような問題を社会からなくすために考えなくてはならないと思います。私は今回の経験で、ＳＮＳのメリットだけではなく、デメリットをたくさん知り、学ぶことができました。皆さんも、今の使い方で本当に良いのか、悪口を言ってしまったことはないのかなど、振り返ってみませんか。今、気がつくことが大切です。

スマートフォンの使い方を改めることでＳＮＳのトラブルが減少し、傷ついたりする人が少なくなっていけば、スマホのもつ便利さを活かして人と人とが繋がり合う未来をつくれるはずです。それは、スマホを使う私達の手にかかっています。私達が使い方を考えることで、スマホを、人を傷つける道具ではなく、未来を作る便利な道具にしていきませんか。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

日本、世界中の人全員に届けたいです。ＳＮＳに関わりがない人も、トラブルに巻き込まれたことがない人も関係なく、ＳＮＳのメリットやデメリットを知ってもらいたいからです。特に、私と同じような経験をした人には必ず届けます。

入賞

大志をもって

紫波町立紫波第三中学校　３年
中 村　楓 花（なかむら・ふうか）

皆さんは、夢あるいは志をもっていますか？私の夢は女性杜氏になることです。

先日、ジェンダーギャップ格差の順位が発表され、日本は 146 か国中 118 位でした。ジェンダー指数は、政治・経済・教育・健康の４分野のデータをもとに算出されます。男女平等をうたっていても、日本ではまだまだ女性の地位は低く、賃金格差が根強く残っていることを指しています。実は、私の目指す杜氏の世界もまさに男性社会と言えます。

ところで、「杜氏」という仕事を知っていますか？日本酒造りには、杜氏と蔵人がいて、蔵人は実務を行い、杜氏は指揮を行う最高責任者とも言えます。江戸時代のころから酒蔵は男性しか入れず、女性が踏み込めない場所でした。近年、この杜氏の世界へも女性の進出が進み、それでも女性杜氏は全国でも 30 人ほどしかいません。

私の家の近くに廣喜さんと呼んでいる廣田酒造があります。私は昔から、廣喜さんから醸し出される甘い匂いが大好きでした。ここに 30 人ほどしかいない女性杜氏の１人がいます。小野裕実さんです。男性社会である酒造りの世界で、女性が活躍するためにはかなりの勇気と覚悟が必要だったことでしょう。生き生きと活躍する小野さんの姿は、私の憧れです。

私は酒造りについてより知りたいと考え、中２の職場体験で廣田酒造へ行きました。その時は酒造りの時期から外れていたため、ケース洗いや樽洗い、ラベル貼りをしました。実際にやってみて初めて知ることも多くあり、私の酒造りの知識というのは本当に限定的なものだと実感しました。それでも、私の貼ったラベルのお酒を誰かが手にするのだと思うと、ワクワクが止まりません。杜氏になりたいという思いがより一層強くなりました。

今、酒造りの世界では平均年齢が 62.8 歳と高齢化が進んでいます。重労働の割にはお給料が安く、なかなか次の働き手が育っていません。それでも酒造りが途絶えないのは、そういうデメリットを超えてなお、やりがいと誇りを感じているからだと思います。

先日の新聞で「大志を持つ」という言葉がふと目に入ってきました。それは、座間耀永さんが『父の航海』という作品で Re ライフ文学賞の最優秀賞に選ばれたという記事でした。「大志を持つ」という言葉は、がんで亡くなったお父さんのメッセージだそうです。さらに驚いたことに座間さんは、高校生でありながら作文教室などを通じて若者同士の交流を図る「AZ　Bande（アイジー・バンデ）」という法人を起業していました。なんという行動力！すごい！自分の得意なことを、人のために生かしている！

女性杜氏になりたい！という夢は、私がようやく手探りでつかんだものです。どうやってそこにたどり着けばいいのか、まだまだ調べ中。座間さんのように自分の得意なところもわからず、夢に対して消極的なのかもしれません。でも私は、あきらめの悪い性格をしています。声も大きいし、感情を表に出す方です。好奇心が旺盛で、１つのことにのめり込むきらいがあります。そんな私が作るお酒は、いったいどんな味がするのでしょう。考えるだけでワクワクします。私は、酒造りを通して、お酒を飲んでおいしそうにしている家族の笑顔、おいしい水分の水や米を守っていきたい。そして、紫波町、いや、海外の人にまで味わってもらいたい、これが私の大志です。この大志をもって、自分のワクワクをずっと追い続けたら、きっと、いや必ず、女性杜氏になれると信じています。

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げていきたいですか？

男性社会である杜氏の世界で活やくするためにはまだまだクリアしなければならない課題がたくさんあると思いますが、周りの目を気にして自分の夢を諦めることのないようにしていきたいです。どれだけ時間がかかったとしても必ず杜氏になり、自分で造ったお酒を家族と一緒にのみたいです。壁にぶつかっても諦めず挑戦し続けて、あとから後悔することのないように生きていきたいと思います。

入賞

命を守る私の決意

北上市立和賀西中学校　２年
小 原　悠 斗（おばら・ゆうと）

今年６月、震災学習で宮古市を訪れました。岩手県で生まれ育ったとは言え、東日本大震災の年に生まれた私にとって、実際にその歴史に触れる機会はこれまでなかなかありませんでした。田老町の防潮堤から海を眺めると、その波の穏やかさに、とても「震災」という文字は浮かびませんでした。しかし、当時の映像を見て私は震えおののきました。黒い波は想像を超える速さでどんどん押し寄せ、あっという間に町を飲み込みました。必死で逃げる人の姿や耳に残るような悲鳴。愕然としました。言葉が出ませんでした。

まだ生きたかった多くの命が一瞬にして失われたこと。自分の命は自分で守らなければいけないこと。ガイドの方の言葉を聞きながらただ呆然と映像を眺める私の脳裏にふと、大好きな叔父の姿が浮かびました。叔父は昨年突然命を失いました。亡くなったその日もいつものように「おやすみ」を告げ、眠りについたそうです。明日が来ることを疑わないまま帰らぬ人となりました。若かった叔父には幼い子どもたちがいます。子煩悩だった叔父にとって、子ども達の未来をそばで見ることができないことはどんなに無念だろうか。考えると胸が張り裂けそうです。命を１つ失うということは、こんなにも周りを悲しませることなのだと知りました。

叔父の死を受け入れていく中で、「命ある自分にできることは何だろうか。」と考える日が何日も続きました。とはいえ、これといった答えも見つからず、悲しみにふたをしながら、ただ日常に流されるように過ごしていました。叔父との別れから１年経った今、被災した町を訪れ、生きたかった多くの命が失われた事実を知ったことや、震災に負けずに復興していく新しい町の姿を目の当りにしたことで、「命ある自分にできることはなんだろうか。」ずっともやもやしていた思いが心をつつくのを感じました。

そんなとき、学校で地区懇談会に参加する機会がありました。会には地域の方や保護者の方々が参加し、ハザードマップをもとに、地区で考えられる自然災害や避難場所を確認しました。私は驚きました。自分の住んでいる地区や通学路がなんと、土砂、土石流災害の予想範囲内だったのです。これまで災害とは無縁だろうと油断していたことを自覚し、のんきな自分が恐ろしくなりました。さらに、避難場所やその経路を知っていたのは大人ばかり。この現実に危機感を覚えた私は、不安に駆られながら過去の歴史を調べました。すると、和賀地区はこれまで何度も被害にあっていたことが分かったのです。幼い頃から耳にしていた雨の日のけたたましいサイレンの音は、地域住民に安全を呼びかける命の道しるべだったのです。

「いつ、何が起こるかわからない。」突然の叔父の死や、震災学習での学びから頭ではわかっていたつもりでした。でも実際は、自分が住んでいる地域の実態さえも把握しておらず、いざというときの準備が何一つできていなかったのです。はっとしました。目が覚める思いでした。地区懇談会では、中学生の私たちはいつも多くの目で見守られていることを知りました。だからこそ命を落とさず、安全に過ごすことができています。私たち若い世代は地域の未来の担い手です。これからは受け身ではなく、手を引き導く側になれるよう、防災への意識を高めていきたいです。

「命ある自分にできることはなんだろうか。」私が見つけた答え、それは、地域を学び、地域と繋がっていくことです。それが、命を守る私の決意です。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

昨今、災害により命を落とす痛ましい事故をよく耳にします。自分の住んでいる地域に起こり得る災害や避難経路などを知り、地域と繋がっていくことが、命を守ることにつながります。これからは、私たち若い世代が手を引き導く側として防災リーダーになっていくべきだという思いを伝えたいと思いました。

入賞

扉を開いて共に生きる

奥州市立前沢中学校　３年
千 田　陽菜乃（ちだ・ひなの）

皆さんは「障がい」「障がい者」と聞いてどんなイメージをもちますか。一口に「障がい」と言っても、耳や目などが不自由な身体的な障がいや、依存症やうつ病、発達障がいのように精神的なものもあり、さまざまです。

私には、「ダウン症候群」という障がいをもっている２つ違いの妹がいます。「ダウン症候群」とは、染色体の異常による先天性の疾患です。通常、人間には 23 組 46 本の染色体がありますが、この障がいをもっている人は 21 番目の染色体が１本多く、発達が遅れていたり、知的障がいがあったりします。妹もまだ自分の気持ちを話すことや、コミュニケーションをとることが難しいです。また、行動がゆっくりで、外出した時や人混みのなかでは、周りに迷惑をかけてしまうことがあります。そんなとき、そのまま通り過ぎたり、優しく声をかけてくれたりと、周りの反応はさまざまです。私たち家族は、申し訳ないなと複雑な気持ちになります。

そんな妹は特別支援学校に通っています。周りは障がいに対して理解がある人ばかりでいじめや差別とは無関係でしたので、この生活が当たり前だと思って過ごしてきました。しかし、視野を広げてみると、多くの国で障がい者差別が問題になっていることに気づきました。十分な教育が受けられなかったり、医療や社会参加などの面で不利な立場に置かれていたりしています。この日本でも、障がい者施設の入所者の殺傷事件や、障がい者の意思に反した手術が旧優生保護法の廃止後も行われていたなど障がい者の権利が奪われることが現実に起こっています。

なぜこのようなことが起こるのでしょう。それは、障がい者についてよく知らないからではないでしょうか。「知らない」ことが「こわい」「不安」につながり、無意識の偏見をもつスタートになっているのではないかと私は考えます。つまり、偏見をなくすためには、障がい者について知り、理解することが大切だと思うのです。

たとえば、私は妹によく勉強を教えるのですが、説明したことがうまく伝わらず、思わず怒ってしまうことがあります。すると、妹は固まってしまい、こちらの言うことをもう一切受け付けなくなってしまいます。そんなとき、私は一度自分の気持ちを落ち着けて、何がわからないのか、難しいのかを考え、丁寧に教えるように心がけています。家族もまた、自分の思いを言葉で伝えるのが苦手な妹のために、可能性のあることを予想して候補を出し合い、クイズ形式で妹の思いを引き出すようにしています。そして、当たったときはみんなで盛大に喜びます。そうすることで、お互い嫌な気持ちになることなく、よりスムーズに意思疎通ができるのです。

また、ダウン症候群の特性でもあるのですが、妹は人見知りをしません。初対面の人にもフレンドリーで、笑顔でハイタッチをします。自分のお菓子を気前よくふるまってくれます。そんな愛嬌たっぷりの普段の妹のことを知ってもらうこと。それがきっと、障がい者理解の第一歩になると思うのです。

現在、障がい者と健常者が共に生きる社会をつくろうという動きが始まっています。障がい者施設で「隔離」するのではなく、生活の場を地域に移して、共生＝共に生きる社会をつくろうという動きです。しかし、実際には、グループホームを開設しようとしても住民の反対に遭い、断念せざるを得ないケースが目立つそうです。反対した住民は、「障がい者を隔離する国の政策の中で、私たちは障がい者を知らずに生きてきた。共生社会と言われても理解が追いつかない。」と話されています。漠然とした不安や偏見をもっている人たちにも、障がい者の日常の姿を知ってもらえたら、きっと理解してもらえるはずです。共生社会への道のりは簡単ではないと思います。しかし、正しい知識をもち、理解しようと寄り添うことで、差別や偏見をなくして、お互いが尊重し合える優しい社会をつくっていけると思います。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張を障がい者についてよく知らない人や、障がい者と接点のない人を含む、この社会で生きているすべての人に届けたいです。そうすることで、障がいについて調べてみようかなと思う人が増えて理解が進み、障がいの方をもっと身近に感じてもらえると嬉しいです。そして、障がいの有無に関係なく、優しい心をもった人たちであふれる社会になることを願っています。

入賞

正しい選択

一関市立一関東中学校　３年
三 澤　愛琳和（みさわ・えりか）

「私は野球に入部したい。」
「いや、別の部活にしなさい。」
中学入学前、私は父から野球部への入部を反対されました。父は学生時代、野球一筋。野球の大変さや辛さをわかりすぎるほどわかっていたのかもしれません。男子に混ざってプレーすること自体、私がついていけるのか心配していました。
「私は大丈夫。」
勇気をだして言った決断だったのですが、父から反対されるのは、自分が否定されているようで、悲しくなりました。
確かに父が言っていたことは正しいのかもしれません。ですが、小学校でソフトボールを経験していた私は、中学校で「野球がしたい」という思いがそれ以上にあったのです。
結局私は、野球部を選びました。実際に入部してみると、父が言っていたとおり、男子に混ざって野球をすることは困難の連続でした。私自身、転校生だったこともあり、はじめはなかなかチームになじめませんでした。ルールも異なり、精神的にも悩みがつきません。
しかし、仲間と野球をしていく中で、やりがいと楽しさを感じ、今では仲間と野球ができて本当に良かったと思っています。
野球を選んだ私の選択は正しかった、自分の気持ちを貫いて良かったと感じています。もし、野球を選んでいなかったら、私の人生は大きく変わっていたでしょう。ですが、今が一番だと思っていますし、自分の選択を後悔したくないとも思っています。
私は、野球という選択をしましたが、人それぞれ個性が違うように、自分がなりたい姿も異なります。そして、周りが私にこうなってほしいと、思い描く姿も違うでしょう。
今まで生きてきた 15 年間の中で、家族が示してくれた道には、父と母それぞれが思う「正しさ」があります。それは、将来私にこうなってほしいという理想の姿であり、私のためを思う気持ちからなる「正しさ」です。ですが、その正しさと同じくらい、私は、自分の思う「正しさ」を大切にしたい。
しかし、自分の正しさを貫くことは、決して良いことばかりではありません。
それぞれの立場で考える理想の姿によって責任や重圧が生じたり、悲劇が起こることもあるでしょう。
例えば戦争。
宗教や文化の違い、民族の考え方の違いなどにより、それぞれが正しいと思っていることを周りにも押し付けようとすることが原因の一つです。戦争によって、善良な人々、幼い命も巻きこまれ、命を失っています。理想を追い求めること、正しさを貫くことは決して良いことばかりではないのです。
そういった問題を踏まえた上で、自分の選択は本当に正しいのかをしっかり考えなければなりません。正しさを貫くというのは、自分のわがままを押し付けることではありません。私も、誰かを傷つけてまで自分の正しさを貫きたいとは思いません。むしろ、その「正しさ」は私の理想とはかけ離れたものであり、間違った「正しさ」です。正しいと判断し、それを貫くには、それを最後までやりきる覚悟が必要になってくるでしょう。
皆さんは、自分が正しいと思った選択ができているでしょうか。
世界を広く眺めてみると、社会の様々な偏見や先入観、固定観念などにより、正しい選択をする以前に、自分のやりたいことができず、可能性を狭めているのが現実です。人種差別、男女の偏見、ＬＧＢＴＱの問題など、たくさんの課題で溢れています。
誰もが自分のしたいことを選択し、認められる世の中。できるならば、そんな世界になることを私は望みます。
まずは自分が正しいと思った選択をしてみること。たとえ、それが失敗に終わったとしても、自分の正しさを貫くことに意味があると私は思います。
失敗を恐れる必要はありません。初めから計画的にできる人間なんてそうはいません。
皆さんは、自信をもって自分の「正しい選択」をしていますか。
私は野球部に入って本当に良かった。
野球部のみんな、本当にありがとう！

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？
自分の選択した道で、もし、自分の思い通りにならなくても、その人生さえも楽しみ、日々挑戦を惜しまない人生にしたい。

入賞

「You will be able to do it !」

一関市立川崎中学校　３年
伊 藤　沙 矢（いとう・さや）

去年の７月、私は市が主催する２泊３日の「英語の森キャンプ」に参加しました。市内の各校から集まった中学２年生が、様々な国籍の講師の先生方と一緒に、ゲームをしたり、劇をしたりしながら、英語に親しむことを目的としています。

「You will be able to do it !」

この言葉は、「今日は緊張しました」という私の振り返りに対して、アイバン先生が書いてくれた言葉です。調べてみると、「明日はできるようになるよ！」という意味だとわかりました。私はハッとしました。今日の私は、同じグループの人に声をかけ、自分から進んで関わろうとしていただろうか。私は、先生方の姿を思い出していました。先生方は身振り手振りを交えながら、英語が拙い私たちに一生懸命に自分の思いを伝えようとしている。それに対して私は？他人の目が気になって、緊張のあまり、「ああ」「うん」しか言えず、同じグループの人に声をかけることもできませんでした。

学校でも、特定の友達との関わりしかなく、他の人とは、どこか距離を感じていました。そのため、誰かが教室に入ってきても挨拶もしない関係が長い間続いていました。このままでは、ダメだ。狭い世界に閉じこもっていたら、考え方が固まってしまい、広い視野で見られなくなってしまう。そもそもこのキャンプに参加した理由は、人とコミュニケーションをとることが苦手で自分の意見を話せない自分を変えたかったから。もしかして今が自分を変えられるチャンスなのかもしれない！私はそう思いました。

２日目、まずいろんな人と話をすることからだと思い、同じグループのＹちゃんに話しかけました。するとＹちゃんも私と同じバドミントン部に所属していることがわかり、話が弾みました。そこで私は気付きました。自分が声を出さなければ、相手も声を出してくれないのです。

英語の森キャンプを終えて、私は２学期から変わろうと心に決めました。そんなとき、担任の先生から生徒会に立候補してみないかと言われました。そんな大役、私にできるのだろうかと悩みました。しかし、せっかくキャンプで自分を変えるチャンスを見つけたのに、挑戦しなくていいのだろうか。次のステップに進まなくていいのだろうか。自分を変えるチャンスはもう二度とこないかもしれない。私は生徒会議長に立候補することにしました。

しかし、自分にはまだ自信がもてずにいました。そんな状態のまま、生徒会選挙の日がやってきました。すると、応援演説をしてくださった先輩が、「沙矢さんは素晴らしい生徒会議長になると確信している。」ときっぱり言ってくださったのです。私のどこを見て、そんなに言い切れるのかと思いながらも私を信じてくれる人がいるという喜びが湧き上がりました。その期待に応えたい、応えなくてはならないという責任も感じました。その瞬間、不安が希望に変わり、ステージからの景色が、いつもとは違って見えました。

私が伝えたいことは、変わることは怖くないということ、自分が変わることで、見えてくる世界が変わるということです。そんな簡単に変えられないという人もいるかもしれません。しかし、そんな人にこそ言いたいのは、自分が変われるチャンスはいくらでもあるということです。大切なのは、変わりたいと強く願うこと、身近にあるチャンスに気付くことです。そのために、まず小さな挑戦をしてみることが大切です。いつもより大きな声で挨拶をしたり、授業で手をあげてみたりするだけで自分にほんの少し自信がつきます。それを繰り返すことで更に大きな自信につながります。

私は自分に自信がついて、自分から人に関われるようになりました。3 年生になって、修学旅行や体育祭の取り組みで、同級生と話し合い、声を掛け合う中で新しい発見がありました。それは、クラスメイトの新たな一面です。9 年間も一緒に過ごしてきたのに、今まで深く知ろうとしなかった自分に後悔しました。

でも、そんな私は卒業してこれからもっと周りの人たちと関わっていきたいと思います。

「You will be able to do it !」

明日も新しい一日、新しい私、新しい何かに出会えると信じて。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

小学生の頃から、殻に閉じこもっていた自分を変えたいと考えており、どこかで自分を変えるチャンスを探していました。そんなときに英語の森キャンプがあることを知り、少し不安でしたが挑戦することにしました。そこで感じた気づきから、生徒会に立候補したり人との関わり方が変わったりしました。この自分の変化を主張したくて書きました。私にこの言葉をかけ、自分を変えるチャンスをくださったアイバン先生に感謝しています。

入賞

向き合う覚悟

遠野市立遠野西中学校　３年
宇 夫　萌 江（うぶ・もえ）

「介護」と聞くと、みなさんはどんなことを想像しますか。

私は、すぐに祖父の介護に苦労する父と母の姿が思い浮かびます。

私が小学校 3 年生の時に、祖父は「要介護４」と告げられました。「要介護４」とは、寝たきりの一歩手前です。それ以前は、祖父に学校の送り迎えをしてもらい、会話をすることも多く、お互いに笑いあって楽しく過ごしていました。しかし、次第に会話がかみ合わないことが増え、気まずさから黙り込むようになりました。私が中学生になってからは、忙しさもあり、祖父からは離れる一方でした。

それから、祖父は立つ、食べる、服の脱ぎ着といった、当たり前のことができなくなりました。誰かがいないと、まともに生活できなくなってしまった祖父。それに加えて認知症でもあったので、夜中に家中を徘徊したりご飯を食べたばかりなのにそれを忘れて、「食べてない」と怒鳴ったりしていました。そんな祖父を毎日介護していた父と母は、私が「大丈夫？」と聞くと、「大丈夫、大丈夫。」と、私を心配させないように言いながらも、排泄物の処理や風呂に入れる介助など、精神的にも肉体的にも疲れ切っていました。

内心では、父や母の助けになりたいと思っていても、介護をすることはもちろん、祖父に近づくことにも抵抗があり、私は行動できずにいました。

ある朝、母がとても困った顔で私に話しかけてきました。「萌江、今日悪いけど父さんも母さんも仕事で帰りが遅くなるの。じいちゃんにご飯を食べさせて、部屋まで連れてってちょうだい。」と

「えっ……。」と思わず声が漏れていました。「介護は両親がするもの」いう勝手な思い込みがありました。初めて介護をすることに対しての恐怖や不安……。その後は、もう何をしていても、祖父のことが頭から離れませんでした。

学校から帰宅して少し経つと、デイサービスの車がきて、祖父を家の中まで運んでくれました。そこからはもう必死でした。祖父の重い体を支えながら、何とか席に座らせ、母の用意してくれたご飯を食べさせました。食べさせながら、本当に久しぶりに祖父と向き合いました。しかし、祖父がこちらを向くことはなく、私が一方的に話しかけるだけでした。それからまた四苦八苦しながら、祖父をベットに連れていき、休ませました。

私がほっと息をついた瞬間、祖父が私に言ったのです。「ありがとう」と。

祖父の表情や声。私はあの時の「ありがとう」を一生忘れません。私にとっては、感謝されることの嬉しさと同時に、介護のイメージを変えるきっかけになった一言でした。

今の日本は少子高齢化が急激に進んでいます。家族の事情などで学生が介護する「ヤングケアラー」も深刻化しています。また、高齢者が同じ高齢者を介護する、いわゆる「老々介護」も増加する一方です。誰もが介護問題の当事者になる。あなたも、私も介護者の一人なのです。

そんな今、私たちに必要なのは、「向き合う覚悟」ではないでしょうか。

介護には、追いつめられる辛さがあります。そんな辛さを乗り越えるには、今、ここにいる私たちが、介護の当事者として行動を起こすことが必要です。

話を聞くこと、体を支えること、物を運ぶこと、何か一つでもいい。私たちが介護の行動を起こすことで、介護を必要とする人も、実際介護している人も、救われることがきっとあるのだと私は思います。

介護は、みんなの「自分事」です。向き合いましょう。一緒に。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を介護に関わっている、関わっていない関係なく色々な方に聞いてほしいと思っています。この主張を聞いたことで介護について考えるきっかけになれればいいなと思います。そして、介護がみんなにとっての「自分事」としてとらえてもらうことが１番の願いです。私の主張を通して、１人でも多くの人が介護の行動を起こしてもらえたら本当に嬉しいです。

入賞

今大切にしたいこと

釜石市立釜石東中学校　３年
小笠原　凜 華（おがさわら・りんか）

みなさんは日常生活の中で言葉を大切にしていますか？自分の思いが相手にきちんと伝わるように､様々な場面で､言葉を大切に使っていますか。普段何気ない会話の中で…。インスタやラインなどの中で…。

今、深刻な社会問題となっているのが、個人の悪口を書き込んだり、広めたり、メッセージを送りつけたりする、インターネット上の誹謗中傷です。

私たち中学生に多いのは、言葉によるいじめなどのトラブル。

大人では、言葉によるパワハラ・カスハラなどのトラブルが、よくニュースで取り上げられています。

私たちの社会では、言葉によって心に深い傷を負う人たちが増えているように感じます。私たちはもっと、自分の言葉に責任を持つべきなのではないでしょうか。

私自身、些細なトラブルをきっかけに、人の言葉や行動を深読みするようになりました。言われてもないこと、起きてもいないことを自分で勝手に思い込んで不安になり、泣く夜が何度もありました。常に周りの目線が気になって、仲良くしてくれている人にさえ、陰で何か言ってるんじゃないかと、相手の言葉を素直に受け止めることができない時もありました。言葉って難しい。でも、言葉じゃないと自分の思いは伝えられない…。まるで言葉の迷路に迷い込んでいるようでした。そのような経験から私は、言葉の大切さを感じたのだと思います。

言葉を通して、相手にきちんと伝えるために必要なことは２つあると思います。

１つ目は、言葉をきちんと選ぶことです。自分の考えがきちんと相手に伝わるのか。誤解を生むような表現になっていないか。自分でその都度チェックすることが必要だと思います。特にも、私たちがよく使う SNS での会話は､短い言葉でやり取りすることが多いため、自分の気持ちや考えにフィットする言葉を使えていない時も多くあるのではないでしょうか。例えば､「ウザイ」と言っても、その言葉の中身には、腹が立ったとか、面白くないとか、悲しいとか色々な感情が入っているのではないでしょうか。相手に自分の気持ちや考えを伝えるためには、どの言葉が相手に伝わるのか、きちんと考える必要があります。

２つ目は、伝えることをあきらめないこと。自分の考えや気持ちを相手に伝えることは簡単ではありません。この言葉だったらどう感じるかな？この言葉で伝わるかな…。相手の立場に立って考えることが必要です。ただ、考えすぎて何を言えばいいのか悩むことも私自身多いです。考え、悩みすぎてもういいやと諦めることもあります。そんな時は、失敗してもいい。何度も挑戦し、伝え続けることが大事です。また、言葉を受けてしっかり返すことも大事です。相手の言葉で傷ついたのならば、きちんと相手にそのことを伝えなければ分かり合うことはできません。何度失敗しても諦めずに伝え続けることで気持ちが伝わるのではないでしょうか。

今日も何気なく使っている言葉。皆さんも自分の使っている言葉を振り返ってみてください。あなたの言葉で救われたり、勇気づけられたりする人が必ずいます。正しい言葉・美しい日本語で、これからも私は思いや考えを伝えていきたいと思います。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

短い言葉でも長い言葉でも、選ぶ言葉１つで自分の考えや人生が変わるぐらい言葉の力はすごいです。そんな中で自分の思いを変換せず、思ったまま伝える人たちがたくさんいます。そのような言葉の大切さが分からない人たちに私の思いが届けばいいなと思います。私の経験した苦しい気持ちを味わう人が少しでも減るよう、今まで以上に言葉を大切にし、相手を思いやる心を持って今よりも優しい人が増え、優しい世界になってほしいです。

入賞

セカイを数学で見ると

田野畑村立田野畑中学校　3 年
畠 山　　陸（はたけやま・りく）

始めに、皆さんはこれを見たことがありますよね。そうです！視力検査で見るアレです。これには、名前があり、ランドルト環と言います。このランドルト環には、数学的性質があります。それは、ランドルト環は直径 7.5ｍｍ／太さ 1.5ｍｍの円の一部が 1.5ｍｍ幅で切れているという性質があります。これを 5m依離れた距離から 1.5ｍｍの切れ目を判別できると視力 1.0 と判断します。これを数学的性質から考えると、視力とランドルト環の大きさが反比例の関係にあることがわかります。

私がこのように「セカイ」を数学で見るようになったきっかけは、中学 2 年生の後半で受験をした数学検定にあります。それまで、数学は学ばなければならない「分野」と考えていました。ですが、数学検定に向けた問題の数々を解いていくと、生活に関するものが多く、数学は社会と繋がっていると思うようになりました。

「数学は絶対、将来使わないよー！。」
「三角形の合同条件なんて、見ればわかるじゃん。」
「点Ｐと点Ｑ動くな！」

こんな風に、数学に否定的な意見を私は耳にしたことがあります。授業だから、というのもあるでしょう。ですが、日常生活や社会を見ると、至るところに数学的要素が潜んでいるのです。というか、数学が存在しないと、今日発展している医療や工学などのテクノロジーは、発展しません。つまり、近年我々がよく使うスマートフォンやタブレット、この文章を書いたシャープペンシルはおろか、ビルや家といった建物も存在しません。そう、数学は目立たないですが社会の幅広い範囲を支えているのです。ここまで十分に数学の大切さについてお伝えすることができたと思うので、次は日常生活で活かせる数学について紹介していきたいと思います。

皆さんはピザやケーキを 6 等分、8 等分にしたいと思った時、8 等分するなら半分に切るという動作を複数回繰り返すでしょう。でも、6 等分となると、その動作だけでは等分することはできません。喧嘩をしないためにも、公平に分けるにも、「正確さ」が必要です。そこで活躍するのが、勿論「数学」です。どうやって等分するのかというと、円周角の定理と三平方の定理を活用します。実は、この 2 つの定理には、共通点があります。それは、「どちらも中学校で習うもの」ということです。つまり、義務教育の範囲の知識で、正確に等分することができるのです。そう考えると、数学は、生きる知恵を学んでいるように思えてきませんか？

2 つ目は、数学というよりは算数となりますかね。皆さんは、買い物の時に、まさか…わざわざ電卓を使って計算…なんてことは…していませんよね。でも、手持ちのお金で足りるのか、と不安にならずに買い物をする方法があります。それは、端数処理という考え方です。端数処理の条件を場面に応じて変えて使うことで、わざわざ計算機を使う必要もなくなるのです。

ここまで、例を 2 つ示して日常生活での数学の活用について紹介してきました。

このように、数学は日常生活、社会で非常に役立っているのです。まだまだ、身の回りには数学が無数に潜んでいる。それを見つけて、「数学の魅力」を味わってほしいと私は思っています。

私の考える数学の魅力とは、

1　物事を論理的に捉えられ、潜んでいる法則や規則性を発見できる。
2　目的に合わせた最適解を見いだせる。

そして、最大の魅力は、「学び進めると、見える世界が広がる。」ということです。

学び進めて広がった世界には、きっとあなたにとっての最適解があると思うのです。その最適解があなただけではなく、身の周りの人の人生までもを豊かにする一歩となり、幸福への道が開けるのではないかと考えてます。

数学は、社会の陰の立役者！！
数学は、社会を支えている！！
セカイは、数学で溢れている！！！

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

自分の周りの友達やクラスメートの多くが「数学は将来使わない。」やテストのときに「数学は諦めるか…。」と言っている。しかし、自分は数学はとても実用的だと思っている。実際、日常生活の中でも数学は至るところに使われている。だから、数学に否定的な意見を持っている人にも数学がどれだけ我々の生活で使われていて、重要かを知ってほしいと思ったからこの作品を書いた。

入賞

「私の夢」

洋野町立種市中学校　３年
南　　翔 斗（みなみ・しょうと）

みなさんは、ボッチャというスポーツを知っていますか。ボッチャとはこのジャックボールにいかに近づけるかを競うパラリンピックスポーツです。先日 24 時間テレビの企画でいただいたボッチャを学校で体験する機会がありました。普段体育の時間は別メニューで歩行練習をしているので、今回同級生と一緒に体を動かすことができ、本当にうれしかったです。

私は生まれつき、身体に障がいがあり、病院の先生からは一生寝たきりになるかもしれないと言われていました。しかし、両親は希望をすてることなく私にとっていつも最善の方法を考え、支えてくれました。そのおかげで私はまわりの子と同じように、保育園に通うことができ、そして小学校に進学しました。支援学校に進むという選択肢もありましたが、たくさんの人と友達になりたいという思いが強く、両親もあと押ししてくれました。

みんなと同じことができないし、もしかしたらいじめられるかもしれない、正直不安もありました。でも、同級生はすぐに私を受け入れてくれました。

中学に入学してすぐ足の手術をすることが決まりました。そして６月、絶対に戻ってくると仲間に約束し、手術を受けました。術後、目が覚めると激しい痛みにおそわれ、その日から夜も眠れないほどの激痛に耐える日々が続きました。どうして手術なんか受けてしまったのだろう。なんで自分だけがこんなにつらい思いをしなければならないのか、完全に心が折れかけました。そんな時でも心の支えとなったのが同級生の存在です。くじけそうな時はいつも、絶対に皆のところに戻ると、気持ちをふるい立たせ、がんばることができました。

退院し、久しぶりに再会した仲間が笑顔でおかえりと声をかけてくれた時のことは今でも鮮明に覚えています。

一人でできないことはたくさんありますが、学校では不自由を感じることはありません。仲間が、自然な形で自分に関わってくれるから、そしてさりげなく助けてくれるからです。そんな仲間には本当に感謝しています。今の自分があるのは同級生のおかげです。

でも、学校の外に出ると、うまくいくことばかりではありません。

バリアフリー化が進み、障がい者にもやさしい社会を目指そうという風潮が高まっているとはいえ、まだまだ改善できる点があると感じます。例えば、町を歩くと特別な目で見られたり、道が傾いていたりでこぼこになったりしています。また、階段以外の移動手段がない建物もあります。これらは身体の不自由な人はもちろん、お年寄りや小さい子供にとってもとても危険なことだと思うのです。

このような問題を少しでも改善して身体の不自由な人も健康な人も共に生きやすい世の中にしていきたい、また、障がいを抱えた人でも働けるような仕事をもっともっと増やしたい、だから、将来私は起業家になって、それを実現させたいと考えるようになりました。

その夢を叶えるためにはまず経済や経営の知識を得る必要があります。だから今、私は大学進学を視野に入れた進路を選択し、勉強しています。

簡単に叶えられる夢ではないということは分かっています。でも、私を支えてくれた全ての人達への感謝の思いをこめて、必ず実現させます！

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張は、家族・友達・学校やリハビリの先生方など、私を支えてくれている全ての人に届けたいです。なぜならば、たくさんの人に支えられ、また、人として必要なたくさんのことを教えていただいたことで今の自分があり、そしてまた、将来起業家になりたいという夢を持つことができたからです。ふだんは、なかなか伝えられない思いや感謝の気持ちをこの機会にみんなに届けたい、そういう思いを主張にこめました。

審査委員長講評

㈱岩手日報社論説委員会委員長　四戸　聡

結果と講評をお話しします。

本日は長時間にわたり、お疲れさまでした。皆さん力を発揮できたでしょうか。出来不出来はあると思いますが、今日の発表だけでなく、ここに至るまでの努力は審査員、ご家族、矢巾中学校の生徒さんなど皆さんに伝わったと思います。

種市中学校の南翔斗さんは都合により審査対象外になり、本人は非常に残念だと思います。それでも最後に実際に発表を聞かせてもらい、南さんの決意が胸に響き、応援したい気持ちになりました。

審査は６人で厳正に行いました。皆さん各地区の代表ですので、甲乙つけがたく、結果は僅差でした。

結果を発表します。優良賞、優秀賞、最優秀賞の順に発表します。優良賞は３人。１人目は盛岡市立大宮中学校　南沙良さん、２人目は花巻市立東和中学校　大松天さん、３人目は盛岡中央高等学校附属中学校　宮本幸奈さん。次に、優秀賞の１人目は宮古市立河南中学校　淺沼いつきさん、２人目は一戸町立一戸中学校　小野太星さん。最後に最優秀賞は陸前高田市立高田第一中学校菅野りれいさんです。

次に講評です。

最優秀賞の菅野さんは非常に表現力豊かで、声に伸びがあり、とても聞きやすかったです。今日に向けて来場者に訴えかけるような練習を十分積んできたんだなと感じました。障害のある弟さんとの日常を通じ、人間の本質、外見でなく中身を見つめる大切さを訴えていました。全体を通し、非常に感銘を受ける発表でした。

次に優秀賞の淺沼さんは、ひいおばあちゃんに教えてもらった戦争に対する思いを受け止め、津波とともに、平和、命の大切さを語り継いでいくという決意が素晴らしいと感じました。論旨もしっかりしており、分かりやすかったです。

小野さんは、お姉さんに知的障害と広汎性発達障害があり、小野さん自身も以前は意思と関係なく話せなくなる難しい障害があった。それでも今日、こうして壇上に立ち、皆の前で発表できた。人は成長できる、変われるということを体現する、前向きな発表が印象的でした。

上位の発表に共通することとして、主張の筋道が立っていて、訴える力があり、分かりやすかったことが挙げられます。あとは最優秀賞の菅野さんに代表される聞きやすさです。オーバーアクションでなく、等身大の自分を素直に表現することが大切です。

今回は障害をテーマにした発表がとても多かった印象があります。障害が自分にあるか、家族にあるかを問わず、問題意識を高く持って生活しているのだなと感じました。障害者差別解消法など関連する法律も整備されていますが、依然として差別とか偏見とか誤解とか、学校でも大人の社会でもまだまだ根強い。それを克服するには、今日まさに発表にあった通り、伝えること、知ること、関わること、そういったことが社会課題を克服する基本になると改めて教えられました。

親の言葉が取り組みのきっかけになったという発表が複数ありました。改めて親や周りの大人が子どもたちにどういう言葉をかけるか、それがすごく大事だということを痛感させられました。

最後に、一番印象に残ったのは、いろいろな物事を皆さんが自分に関係する問題として捉えようとしている姿勢です。言葉では言えるけれど、簡単なことではありません。それは私が新聞記事を書いていてもそうです。発表を発表だけに終わらせることなく、今日の決意を是非実践し、これからも頑張っていただきたいと思います。

各地区大会の開催結果

（注）出場者欄　最＝最優秀賞　秀＝優秀賞　良＝優良賞

盛岡東地区　応募者数　399人

日　時　令和6年8月30日（金）13：00～16：00

場　所　盛岡東警察署　5階会議室

審査委員

㈱岩手日報社編集局報道センター報道部第二部長	菊池拓朗
盛岡教育事務所在学青少年指導員	佐々木　真
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	佐々木秀一
盛岡東警察署刑事官	菅原　毅
わたしの主張盛岡東地区大会実行委員会長	大畑正二

出場者

	1	知ることが第一	下小路	3年	三浦　悠
最	2	今、僕がここにいる意味	上　田	3年	村上　陽
会長賞	3	フィルターの先に見える世界	河　南	3年	佐藤穂佳
	4	辛い時こそ成長を	仙　北	3年	日當かなめ
秀	5	障がいを見守る愛おしい日々	大　宮	3年	南　沙良
	6	数学と地球の未来	米　内	3年	多田繕治郎
	7	受け入れることから	黒石野	3年	駒木優衣菜
	8	心の薬	城　東	3年	川原由莉
	9	ＳＮＳは何のために	松　園	3年	伊藤　悠
	10	良い印象を作り出すために	見　前	3年	向井　煌
秀	11	剥がした「ラベル」の向こう側	飯　岡	3年	五代儀光葉
	12	未来を見据えてフードロスを減らそう	乙　部	3年	福士瑛那
	13	私なりの音色で	見前南	3年	菊地柚良
	14	私が考える平和な社会	北松園	3年	澤口咲彩
良	15	心のバリアフリー	玉　山	3年	片島理心
	16	自己革命	渋　民	3年	岩崎花凜
	17	自信からの挑戦状	巻　堀	3年	中野陽香里
良	18	死の選択肢	白百合	3年	古屋みづき
良	19	私が望む「大人」の姿	岩大教育学部附属	3年	千葉彩華

盛岡西地区　応募者数　780人

日　時　令和6年8月27日（火）13：30～16：30

場　所　滝沢ふるさと交流館　チャグチャグホール

審査委員

㈱岩手日報社編集委員	工藤武彦
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	阿部真一
滝沢市教育委員会社会教育指導員	榊原世士
雫石町教育委員会社会教育指導員	下川恵司
盛岡西警察署長	南部一成
盛岡西地区少年警察ボランティア協会長	阿部　優
盛岡西地区防犯協会連合会理事	佐藤裕子

出場者

良	1	自分	滝沢第二	3年	阿部健人
	2	戦うべきは過去の自分	土　淵	3年	本間優衣
良	3	岩手の中学生として	滝　沢	3年	小山田恭永
良	4	「今の私があるのは…」	滝　沢	2年	外久保　穂
最	5	心のバリアフリー	盛岡中央高等学校附属	2年	宮本幸奈
	6	命を守りたい	厨　川	3年	倉原沙弥
	7	命	一本木	3年	芳田　苺
	8	何歳まで、車の運転しますか	城　西	3年	平野利秀人
秀	9	席替え	北　陵	3年	村田柚希乃
	10	言葉の重み	姥屋敷	1年	佐々木歩惟
	11	言葉と文化の違いを乗り越える	雫　石	3年	吉田玲雪
秀	12	受け継ぐ	滝沢南	3年	泡渕暖生

北岩手地区　応募者数　97人

日　時　令和6年8月30日（金）13：30～16：00

場　所　岩手町スポーツ文化センター　森のアリーナ

審査委員

岩手町教育委員会教育長	佐藤　卓
八幡平市教育委員会教育長	星　俊也
葛巻町教育委員会教育長	石角則行
岩手警察署長	高橋　淳
岩手警察署生活安全課長	菅波　進
北岩手地区少年警察ボランティア協会長	松村昭一
㈱岩手日報社岩手支局長	齋藤大樹

出場者

	1	今度は私たちの番	西　根	3年	平野星空
良	2	しあわせ	沼宮内	3年	山本心十葉
良	3	人間は考える葦である	江　刈	3年	木下榎乃
	4	親と子の向き合い方	葛　巻	3年	近藤晴希
秀	5	私の考える食の自由	松　尾	3年	梶本創喜
	6	真の多様性を	川　口	3年	岩澤深空
最	7	スマートフォンでつくる未来	西根第一	3年	松浦うのん
	8	たどり着いた場所	小屋瀬	3年	土谷　雫
秀	9	岩手町とぼくらの未来	一方井	3年	角舘千桜
良	10	みんなひとりじゃない！	安　代	3年	畠山　結衣

紫波地区　応募者数　189人

日　時　令和6年9月4日（水）13：45～16：00

場　所　矢巾町立矢巾北中学校

審査委員

紫波町こどもセンター副センター長	菅野秀一
矢巾町教育委員会教育研究所所長補佐	小山田　孝
盛岡教育事務所在学青少年指導員	中屋　豊
紫波警察署長	千葉浩哉
㈱岩手日報社編集局報道センター報道部	小向里恵子

出場者

最	1	大志をもって	紫波第三	3年	中村楓花
秀	2	真の平等をめざして	紫波第一	3年	伊藤夢亜
	3	未来を生きていくために	紫波第二	3年	佐藤結萌
良	4	「ありがとう」のその先に	矢巾北	3年	佐藤篤太
良	5	私の願い	矢　巾	3年	吉田羽菜
	6	「許す」ということ	紫波第二	3年	長澤知弥
	7	「言葉」を伝える大切さ	矢　巾	3年	芦名澤穂美

花巻地区　応募者数　265人

日　時　令和6年9月11日（水）13：30～16：00

場　所　花巻市定住交流センターなはんプラザ　COMZホール

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	齊藤義宏
花巻市青少年育成市民会議会長	鎌田幸也
花巻市校長会小学校部会長（花巻市立花巻小学校長）	沼田弘二
花巻警察署長	高橋幸伸
花巻市教育委員会スクールソーシャルワーカー	髙橋啓悦
㈱岩手日報社花巻支局長	小野寺隼矢

出場者

	1	背中を押してくれるもの	石鳥谷	3年	藤原賢真
良	2	あなたの隣にいる人は	宮野目	3年	岡本來海
秀	3	自信を育てる	湯　口	3年	佐々木実泉
	4	公平な社会を考える	花巻北	3年	菊池　高
	5	環境	南　城	3年	平野義燿
良	6	外国人だからといって	湯　本	3年	菊池圭斗
最	7	未来に生きる、地域のためにできること	東　和	3年	大松　天
	8	ぼくらがアニメから学べること	大　迫	3年	阿部太一
	9	音楽とともに生きる	矢　沢	3年	及川愛夢
良	10	明日へつなぐ私達のふるさと	西　南	3年	小原士門
秀	11	音でつながる絆や心	花　巻	3年	千葉あさひ
	12	貧しさを豊かさに変えるためには	石鳥谷	3年	畠山真莉華

北上地区　応募者数　693人

日　時　令和6年8月29日（木）13：30～16：00

場　所　日本現代詩歌文学館

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	盛島　徹
北上市教育委員会教育委員	照井睦子
西和賀町教育委員会教育長職務代理者	深澤武志
和賀地区校長会（北上市立和賀西小学校長）	大鷹　真
㈱岩手日報社北上支局長	八重樫和考

出場者

	1	りんごから考える未来	東　陵	3年	昆野未央
	2	日々の感謝を忘れないで	飯　豊	2年	向谷地ひなた
秀	3	みんなとつなぐ鬼剣舞	南	3年	柏木悠希
	4	「普通」をみつめる	湯　田	3年	髙橋ひおり
	5	私が自信を持てるまで	北上北	3年	前関香歩
良	6	相手を知ることで生きやすく	飯　豊	3年	柏葉幸橙
	7	「緑化」の本当の意味	上　野	3年	三浦くるみ
	8	消滅可能性自治体からの脱却	沢　内	3年	加藤那奈
	9	誰もが生きやすい世の中に	北　上	3年	吉田望奏
良	10	自分を変えるのは	和賀東	3年	甲木杏奈
	11	ありのままに生きる	江釣子	3年	小原紗都
最	12	命を守る私の決意	和賀西	2年	小原悠斗

奥州地区　応募者数　946人

日　時　令和6年8月28日（水）13：40～15：45

場　所　前沢ふれあいセンター　チェリーホール

審査委員

㈱胆江日日新聞社編集局長	小野寺和人
㈱岩手日報社奥州支局長	千葉陽介
県南教育事務所在学青少年指導員	朝倉啓二
奥州地区少年警察ボランティア協会長	髙橋直志
奥州警察署長	大越　剛

出場者

	1	命を大切に	水沢南	3年	尾形美羽
良	2	ありのままの風景を百年先まで	胆　沢	3年	鈴木颯介
	3	日本を変える「連鎖」	江刺第一	3年	菊地奏希
秀	4	忘れてはいけない	東水沢	3年	及川睦稀
良	5	原点から実現へ	水　沢	3年	田髙良咲希
	6	気づいていないだけで	金ケ崎	3年	黒沢凛音
	7	続けること、全うすること	衣　川	3年	髙橋李幸
最	8	扉を開いて共に生きる	前　沢	3年	千田陽菜乃

一関地区　応募者数　87人

日　時　令和6年8月27日（火）14：00～16：30

場　所　一関文化センター　中ホール

審査委員

㈱岩手日報社一関支社長	小山田泰裕
県南教育事務所教育相談員	皆川　啓
一関市教育委員会教育研究所教育相談員	渡邉　淳

平泉町教育委員会教育委員　三浦英子
一関警察署長　阿部好暢

出場者

	1	言葉は命をつなぐ糸	一関	3年	畠山怜
良	2	学校からいじめをなくすために	一関一高附属	3年	榊原丈
秀	3	言葉の力	桜町	3年	山入端心音
	4	友人と共に	厳美	3年	辻本喧思
最	5	正しい選択	一関東	3年	三澤愛琳和
良	6	言葉をわかりあう	平泉	3年	佐藤美音
	7	黒いダイヤのREDな現実	萩荘	3年	田村來都
	8	「当たり前は」……	花泉	3年	佐々木結奈
	9	野球が教えてくれたもの	磐井	3年	髙橋一球

一関東地区　応募者数　143人

日　時　令和6年8月26日（月）13：30～15：00
場　所　川崎市民センター
審査委員
県南教育事務所在学青少年指導員　北村正俊
千厩警察署長　水沼正彦
一関市教育委員会教育研究所教育相談員　及川輝美
㈱岩手日報社一関支社長　小山田泰裕
㈱岩手日日新聞社編集局整理部長　菅原親裕

出場者

	1	僕たちと地域の伝統	室根	3年	土屋咲人
良	2	広がれ、ハピクロ！	東山	3年	佐藤樹
	3	ともに生きていく	千厩	3年	秋尾健太
最	4	「You will be able to do it !」	川崎	3年	伊藤沙矢
秀	5	私らしく生きる	大東	3年	三浦咲羅
	6	挑戦する心を大切に	藤沢	3年	佐藤迅

気仙地区　応募者数　324人

日　時　令和6年8月29日（木）14：00～15：30
場　所　住田町役場　町民ホール
審査委員
沿岸南部教育事務所在学青少年指導員　及川賢一
気仙地区防犯協会連合会副会長　安田由紀男
大船渡警察署長　高橋紀彦
気仙地区教育委員会協議会会長　柏崎正明
㈱東海新報社社長　鈴木英里
㈱岩手日報社大船渡支局長　菅川将史

出場者

	1	「希望」が照らす道	高田東	3年	金野莉央
	2	不正解に挑む	東朋	3年	佐々木莉沙
秀	3	何気ない「ひとこと」	大船渡第一	3年	滝田智士
	4	給食から考える僕たちの未来	大船渡	3年	尾澤樹
秀	5	生きる力	末崎	3年	村上奈央
	6	一人じゃない	住田	3年	紺野泰聖
最	7	あなたと共に	高田第一	3年	菅野りれい

遠野地区　応募者数　110人

日　時　令和6年8月28日（水）10：00～11：30
場　所　遠野市民センター　大ホール
審査委員
中部教育事務所在学青少年指導員　齊藤義宏
遠野市教育委員会事務局学校教育課長　齋藤真
遠野市校長会（遠野市立達曽部小学校長）　沼田玲子
遠野市少年委員協議会会長　菊池タキ
㈱岩手日報社遠野支局長　菊池宗矩
遠野警察署長　柾谷修

出場者

良	1	私の人生	遠野東	3年	曾原結
良	2	自分だけの色	遠野	2年	多田宗一郎
最	3	向き合う覚悟	遠野西	3年	宇夫萌江
秀	4	森に帰ろう	遠野	3年	菊池莉緒

釜石地区　応募者数　76人

日　時　令和6年9月2日（月）14：00～16：00
場　所　大槌町文化交流センター　おしゃっち
審査委員
大槌町教育委員会教育長　松橋文明
釜石市教育委員会　千葉伸一
釜石警察署長　三浦正人
㈱岩手日報社釜石支局長　三浦隆博

出場者

	1	真ん中のジャッジを目指して	唐丹	3年	金野悠人
	2	言葉の力と責任	釜石	3年	中村元香
	3	「違い」が教えてくれたこと	吉里吉里学園	3年	倉本華
秀	4	今、大切にしたいこと	釜石東	3年	小笠原凜華
	5	たくさんの光を差す方へ	大槌学園	9年	小川塁
最	6	壁のありがたみ	甲子	3年	鈴木響太朗
良	7	考えてみよう、平等について	大平	3年	佐藤百奏

宮古地区　応募者数　38人

日　時　令和6年8月30日（金）9：00～12：45
場　所　宮古市地域創生センター　4階多目的ホール
審査委員
宮古教育事務所在学青少年指導員　妻田篤
宮古市教育委員会教育研究所長　菊地裕

山田町教育委員会教育研究所長　佐々木　優
㈱岩手日報社編集局次長　熊谷宏彰
宮古警察署長　佐藤　普

出場者

秀	1	響け！あなたの心に	津軽石	3年	相澤一輝
秀	2	中学生だからこそ	山　田	3年	荒川千紗
	3	温かな心で～私のボランティア活動～	川　井	3年	立花心実
	4	人はそれぞれ違うのだから	花　輪	3年	村上優真
	5	片手に込められた想い	第　一	3年	下河原瑠人
	6	勇気	崎　山	3年	中里結衣
	7	相手の心に目を向けて	宮古西	3年	藤原雪千琉
	8	変わり続けた3年間	重　茂	3年	石濱穂波
良	9	先人たちの想いを	新　里	3年	川崎瑛史
良	10	あなたへ	第　二	3年	中嶋　蓮
良	11	「個性」という名の宝物	田老第一	2年	畠山芽依
最	12	語り継ぐ	河　南	3年	淺沼いつき

下閉伊北地区　応募者数　44人

日　時　令和6年8月28日（水）13：00～15：00
場　所　岩泉町民会館

審査委員

岩手県立岩泉高等学校長　岩渕雅明
㈱岩手日報社　佐藤成人
岩泉町教育委員会教育長　袰岩千裕
田野畑村教育委員会教育長　藤岡宏章
岩泉警察署長　三浦義明

出場者

	1	目標の在り方	小　本	3年	阿部利久翔
	2	努力に大事なもの	小　本	3年	佐々木元晴
	3	○○との付き合い方	小　川	3年	上舘陽菜
	4	誰だって変われる	小　川	1年	竹花煌芽
秀	5	優しい光に導かれて	田野畑	2年	山崎美優
最	6	セカイを数学で見ると	田野畑	3年	畠山　陸
良	7	つないでいく	岩　泉	3年	長﨑乃々佳
	8	人の心は紙	岩　泉	2年	佐藤心愛

久慈地区　応募者数　229人

日　時　令和6年9月2日（月）13：30～16：20
場　所　久慈市文化会館アンバーホール

審査委員

普代村教育委員会教育長　三船雄三
久慈警察署長　岩間　茂
久慈地区中学校文化連盟　千田博之
㈱岩手日報社久慈支局長　平野祥子
久慈地区少年警察ボランティア協会長　岡本敏幸

出場者

	1	思いやりで人を繋ぐ	中　野	3年	大粒来圭吾
	2	伝統を繋ぐために	大　野	2年	池田結月
	3	応援は力なり	野　田	3年	晴山将汰
良	4	伝統を引き継ぐ価値	長　内	3年	井戸快音
	5	私にとっての幸せ	久　慈	3年	津田康介
良	6	言葉の向こうにあるもの	侍　浜	3年	川戸美唯奈
良	7	誰かのために	夏　井	3年	上川原佳歩
秀	8	幸せはいつもそばに	山　形	2年	佐々木　蘭
	9	「普通」というルール	大川目	3年	髙谷真咲
秀	10	あなたの考えを聞かせてほしい	宇　部	3年	瀧澤紗柚奈
最	11	私の夢	種　市	3年	南　翔斗
	12	Let's Go Beyond Tradition!	普　代	2年	長谷清正
	13	あなたは1人ではない	三　崎	3年	大久保侑真

二戸地区　応募者数　9人

日　時　令和6年9月2日（月）13：30～15：30
場　所　二戸市シビックセンター

審査委員

県北教育事務所在学青少年指導員　浅倉　圭
九戸村教育委員会教育長職務代理者　上山昭一
二戸警察署長　黄川誓二
㈱岩手日報社二戸支局長　猪越雅哉

出場者

良	1	自分を信じて	福　岡	3年	下斗米美南
	2	私の目指すガイド	金田一	3年	月折莉子
	3	続ける先に	浄法寺	3年	三浦楓雅
	4	全員響音	軽　米	3年	黒瀬ひなた
	5	伝統の尊厳を守る	九　戸	3年	細川展孝
秀	6	私の幸せ	九　戸	3年	佐藤なつ美
最	7	ハンデがあっても	一　戸	3年	小野太星
	8	ふるさとの味を守るために	奥中山	3年	切欠和輝

令和６年度（第 26 回）「わたしの主張岩手県大会」 審 査 要 領

１　審査基準

⑴　採点の基準

各審査委員の持ち点は、発表者１人につき、次の区分による 100 点とし、採点は減点法とする。

ア　論　旨　　55 点
イ　表　現　　30 点　｝計 100 点
ウ　態　度　　15 点

エ　時　間　　主張時間は５分とする。

※　主張時間が４分 30 秒未満の場合又は５分 30 秒を超える場合は、それぞれの時間から 10 秒を過不足するごとに１点を減点する。

※　発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとする。

⑵　採点の内容

ア　論　旨：①　若者（中学生）らしい感性で、新鮮な主張であるか。
　　②　個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
　　③　自己の目標を実践する意欲や、提言に関する熱意・真剣さが感じられるか。
　　④　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

イ　表　現：①　熱意と説得力があり、聴衆に感銘を与えたか。
　　②　言葉や発声は明瞭で、抑揚・間の取り方も適切であったか。

ウ　態　度：　（聴衆をよく見て）落ち着いた態度であったか。

エ　時　間：・主張開始後５分　……　ベルを１回
　　・主張開始後５分 30 秒 ……　ベルを２回

２　審査方法

⑴　審査表の記入

各審査委員は、各発表者の審査結果を、審査採点票（個票）及び審査採点票（控）に記入する。

⑵　順位の決定

各発表者の主張終了後、審査会において最優秀賞１人、優秀賞２人及び優良賞３人を選考する。

受賞者の決定は、採点集計表を参考とし、審査委員の協議によるものとする。

なお、最優秀賞受賞者は、「少年の主張全国大会」候補者として、北海道・東北ブロック審査会に推薦するものとする。

３　成績発表及び講評

審査委員長が結果を発表し、講評を行う。

※　各地区大会の審査要領は、岩手県大会審査要領に準じるものとする。

令和６年度（第 26 回）「わたしの主張岩手県大会」実施要綱

1　趣　旨

次代を担う子どもたちは、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける健やかな成長が求められています。

本大会は、広い視野と柔軟な発想、創造性とともに、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力を身に付けるための契機となることを願い、未来に向けた夢や社会に対する意見・希望、日常生活で感じたことを素直に表現する弁論の場を提供することにより、青少年の健全育成の充実を図ることを目指しています。

2　対　象

県内に在住している中学生及びこれに相応する学籍又は年齢にある方

3　主　催

わたしの主張岩手県大会実行委員会

【　岩手県　岩手県教育委員会　岩手県警察本部　（公社）岩手県青少年育成県民会議
（公社）岩手県防犯協会連合会　（株）岩手日報社　岩手県中学校文化連盟　】

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

4　共　催

矢巾町　矢巾町教育委員会

5　後　援

岩手県中学校長会　岩手県ＰＴＡ連合会　ＮＨＫ盛岡放送局　ＩＢＣ岩手放送　テレビ岩手
エフエム岩手　めんこいテレビ　岩手朝日テレビ

6　開催日時

令和６年９月 19 日（木）　13 時～16 時 30 分

7　開催場所

田園ホール（紫波郡矢巾町大字南矢幅第 13 地割 123 番地）

8　開催方法

参集しての通常開催としますが、新型コロナウイルス感染症の拡大等の状況により、一般の観客は入場しない無聴衆での開催や、会場には参集せず作文・映像での審査会とする場合があります。

9　出場者

別に定める推薦要領に基づき、地区大会において推薦された 17 名による主張発表を行います。

10　発表内容

⑴　主張の内容

以下の内容を参考として、自らの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを率直に表現してください。
未発表・自作のものに限り、執筆及び推敲時どちらにおいても生成 AI を利用しないでください。

分類	内　　容	これまでの例(参考)
ア	・ 社会や世界に向けての意見 ・ 未来への希望や提案　　等	・ 世界の環境問題、国際社会について ・ 地域の伝統文化・伝統芸能 ・ 貧しい国への支援 ・ 介護の問題 ・ 夢に向かって　　等
イ	・ 家庭、学校生活、社会（地域活動）との関わり ・ 身の回りや友達との関わり　　等	・ 命の尊さ ・ 共に生きる(障がいと向き合う) ・ 家族愛 ・ 人との関わり ・ 復興への思い　　等
ウ	・ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言　等	・ 犯罪のない明るい地域社会づくり ・ 交通事故を防止するには ・ いじめのない社会生活 ・ 公共のマナーや規則を守ること ・ インターネットやスマートフォンの危険、正しい利用方法 ・ 報道されている事件や事故の防止　　等

※　複数の分類に関わることも想定されます。重複可能です。

※　商業的な固有名詞の使用は、極力避けるようにしてください。
（悪い例：○○県にある○○旅館　良い例：○○県にある旅館　等）

⑵ 発表方法

自由（日本語で発表することが条件）

※　発表の際はマイクを使用します。

※　発表に際しては、パフォーマンス（例えば、服装は自由とし、小道具を使用してもよい。）を取り入れてもよいこととします。ただし、発表者以外の動作・補助等は認めません。

※　発表者の礼は、発表前後の２回とします（礼は審査対象とはなりません。）。

⑶ 発表時間

５分間（400 字詰め原稿用紙４枚程度）

※　発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む。）から読み終わり（パフォーマンス含む。）までとします。

※　発表時間が４分 30 秒未満の場合又は５分 30 秒を超える場合は、採点の際に１点減点となりますので、注意してください。（さらに 10 秒ずつ過不足するごとに１点ずつ減点）

【発表時間による減点】

時間	4′ 10～4′ 19	4′ 20～4′ 29	4′ 30～5′ 30	5′ 31～5′ 40	5′ 41～5′ 50
減点	2	1	0	1	2

11　表　彰

発表終了後、直ちに開催する審査会において、最優秀賞１名、優秀賞２名及び優良賞３名を選考し、表彰します。また、審査会の審査過程によっては、審査会特別賞が選考される場合があります。

なお、最優秀賞受賞者は、北海道・東北ブロック審査会に「少年の主張全国大会」の候補者として推薦します。

12　自然災害等への対応

⑴ 自然災害等による大会中止

大会中止の判断基準は、以下のとおりとします。

ア　自然災害等により、欠席者が３分の１を超える見込みの場合（７名以上が参加できない場合）

イ　会場及び会場周辺の被災等により、当日の大会開催が困難な場合

⑵ 大会中止時の対応について

ア　当日８：30 前に中止と判断した場合は、直ちに参加者等に連絡します。

※　当日８：30 以降は、原則として参加可能者のみで大会を実施し、最優秀賞受賞者を東北・北海道ブロック大会に推薦します。作文審査は行いません。

※　当日８：30 以降であっても、12⑴イと判断される場合には、大会を中止し、直ちに参加者等に連絡します。

イ　大会中止の場合も、12(1)イの場合を除き、会場に集合可能な審査員に集合していただき、作文審査により最優秀賞を決定します。

⑶ 新型コロナウイルス感染症の拡大等に伴うリスクへの対応

感染拡大や学校行事等の状況を考慮しながら、開催の有無や開催の方法等について実行委員会で随時協議し、各地区実行委員会に連絡します。

13　その他

⑴ 提出された原稿は返却しません。また、岩手県大会に参加した作品の出版権・放映権は、大会主催者に帰属します。

⑵ 岩手県大会出場者及び引率者(１名)の旅費は、主催者が負担します。県大会出場者には、出場決定後改めて案内を送付します。

14　問合せ先

【主に実施要綱や地区大会の結果取りまとめ等に関すること】

わたしの主張岩手県大会実行委員会事務局　〒020-8570　盛岡市内丸10-1
岩手県環境生活部若者女性協働推進室内　　TEL　019-629-5336・FAX　019-629-5354

【主に県大会出場者や県大会の運営に関すること】

公益社団法人　岩手県青少年育成県民会議　〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通1丁目7-1　アイーナ6階
TEL　019-681-9077・FAX　019-681-9078

【主に地区大会の運営・予算に関すること】

公益社団法人　岩手県防犯協会連合会　〒020-0881　盛岡市天神町11-1　岩手県交通安全会館
TEL　019-653-4448・FAX　019-653-4488

わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者

備考欄（全国大会出場）：※1　青少年育成国民会議会長奨励賞受賞、※2　文部科学大臣奨励賞受賞
※3　審査委員会委員長賞受賞、※4　国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

回	年度	開催期日	会場	最優秀賞受賞者			
				学校名・学年	氏名	発表題	備考
1	11	11.9.24	盛岡市立飯岡中学校	一関市立厳美中学校　3年	佐藤　遥	苦悩の日々を乗り越えて	
2	12	12.9.21	矢巾町 田園ホール	花巻市立南城中学校　2年	小野寺　静	日本と中国のかけ橋に	
3	13	13.9.19	玉山村 姫神ホール	釜石市立甲子中学校　3年	八幡　茜	海外語学学習で学んだ心	※1
4	14	14.9.19	雫石町 野菊ホール	久慈市立久慈中学校　3年	高安　愛美	風に吹かれて	※1
5	15	15.9.19	岩手県立大学講堂	東山町立東山中学校　3年	高橋　志帆	老いも誇り	
6	16	16.9.27	花巻市文化会館	北上市立南中学校　3年	菅原　周平	噺の言葉と言葉の話	※2
7	17	17.10.4	盛岡市 都南文化会館	盛岡市立上田中学校　3年	坂本　潤奈	私は地球人	※2
8	18	18.9.20	盛岡市 アイーナホール	遠野市立上郷中学校　2年	奥寺　大輔	とらわれない心で	
9	19	19.9.26	滝沢村 チャグチャグホール	普代村立普代中学校　3年	内野沢　さつき	おじいちゃんからの伝言	
10	20	20.9.24	紫波町立紫波第二中学校	八幡平市立松尾中学校　3年	藤原　寛	「吃音」の壁を越えて	※1
11	21	21.9.24	盛岡市 盛岡劇場	盛岡市立上田中学校　3年	西郷　華菜	伝えていく責任	※4
12	22	22.9.24	花巻市立石鳥谷中学校	盛岡市立見前中学校　3年	因幡　百合絵	どうせ枯れる花ならば	
13	23	23.9.22	滝沢村立滝沢南中学校	陸前高田市立気仙中学校　3年	小笠原　和恵	高らかに　響け	※3
14	24	24.9.20	盛岡市 盛岡劇場	遠野市立小友中学校　2年	菊池　愛利子	「命」をいただく仕事	
15	25	25.9.19	矢巾町 田園ホール	山田町立山田中学校　3年	中村　奈緒	「当たり前」の中に生きる	※4
16	26	26.9.18	雫石町 野菊ホール	岩手大学教育学部附属中学校　3年	渡邉　美卯	一言の重さ	※4
17	27	27.9.11	盛岡市 キャラホール	西和賀町立沢内中学校　3年	佐々木　瑠海	支えられている命だから	
18	28	28.9.15	盛岡市 小田島組☆ほ～る	北上市立南中学校　3年	石川　杏奈	強く　優しく　未来を見つめて	
19	29	29.9.14	滝沢市 ビッグルーフ滝沢	奥州市立東水沢中学校　3年	小野寺　悠来	得意なことを数えよう	※4
20	30	30.9.14	矢巾町 田園ホール	岩手県立一関第一高等学校附属中学校　3年	小野寺　千里	挑戦し続ける勇気	※4
21	R1	R1.9.18	盛岡市 小田島組☆ほ～る	宮古市立第一中学校　3年	小笠原　凜	自由にはばたける社会へ	
22	R2	R2.9.16	滝沢市 ビッグルーフ滝沢	盛岡市立下橋中学校　3年	鈴木　凜	生き続ける	
23	R3	R3.9.15	岩手県庁会議室	滝沢市立柳沢中学校　3年	髙橋　美花	挨拶	
24	R4	R4.9.14	盛岡市 小田島組☆ほ～る	田野畑村立田野畑中学校　2年	三上　結楽	色を纏うように	
25	R5	R5.9.13	盛岡市 盛岡劇場	北上市立南中学校　2年	千田　ソフィア	心に平和のとりでを	

（参考）

「第 46 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2024～」入賞作品

【内閣総理大臣賞】

宮城県代表

ケイバージーバ（けいばーじーば）さん　　栗原市立栗原南中学校　3 年

発表テーマ ： 一隅を照らす

【文部科学大臣賞】

千葉県代表

松原　蒼天（まつばら・そうた）さん　　長生村立長生中学校　1 年

発表テーマ ： 大切な家族

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

熊本県代表

友枝　紗寧（ともえだ・すずね）さん　　熊本市立鹿南中学校　3 年

発表テーマ ： ついでにしているだけ

【審査委員会委員長賞】

山形県代表

井上　愛奈（いのうえ・あいな）さん　白鷹町立白鷹中学校　3 年

発表テーマ ： 障害を乗り越えて

愛知県代表

村木　新（むらき・あらた）さん　西尾市立鶴城中学校　3 年

発表テーマ ： 「じゃない方」になって気づいたこと

1　「第 46 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2024～」について

(1)　主　　催：独立行政法人国立青少年教育振興機構（後援　内閣府、文部科学省ほか）

(2)　開催日時：令和 6 年 11 月 24 日（日）13：00～16：00

(3)　開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

(4)　参 加 者：各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 の中からブロック代表として選ばれた 12 名

※　岩手県大会最優秀賞受賞者の陸前高田市立高田第一中学校 3 年菅野りれいさんが努力賞を受賞しました。

2　入賞作品を印刷物等に転載する場合は、国立青少年教育振興機構（教育事業部事業企画課 TEL03-6407-7737）から許可を受けてください。

【内閣総理大臣賞】

一隅を照らす

宮城県　栗原市立栗原南中学校　３年　ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで３５年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学４年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、４年生からは、日本で生活しています。

６年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」

そう思うことが何度もありました。どうしようもなくて泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で（یو کونج روښانه کړئ）。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

【文部科学大臣賞】

大切な家族

千葉県　長生村立長生中学校　１年　松原　蒼天

「大事な話がある。」
小学２年生のある日、
「お母さんがすい臓がんになった。」
と、父から聞きました。「がんなんてきっと風邪みたいにすぐ治るだろう。」そのときはそう思っていました。でも、簡単には治らないこと、治すには抗がん剤をたくさん投与しなければならないこと。それがわかったとき、幼かった僕は、不安な気持ちでいっぱいになりました。

長生村に引っ越したあと、病院が少し遠くなりましたが、それでも、１ヵ月に２、３回は病院に通っていました。

やがて、母はあまり歩けなくなりました。僕は母の体調がだんだんと、悪くなっていることに気づいていました。「どうしよう……。お母さん、お母さん……。」母が、自宅で治療をするようになってから、僕には口に出せなかったことがありました。「お母さん、もう少しで死んじゃうのかな……。」

５年生になった２月３日。３時間目。授業を受けていると、いきなり父に呼ばれました。「お母さんの前では、泣くなよ。」

父からそう言われ、僕は、車の中で泣きました。

家に帰ると、母の様子が朝とは違っていました。僕は、母に元気を出してもらおうと一生懸命声をかけました。母はもう何も喋れませんでした。僕は、母の近くで、看護師さんに母との思い出話をしました。思いつくかぎり。たくさん。父と兄が帰ってきたとき、母は、亡くなってしまいました。家族を一人亡くし、僕は、めちゃくちゃ泣きました。１１時１５分でした。

母が亡くなった後、１１時１５分をさした時計が偶然目に入る度に、「お母さん。何もできなくてごめんなさい。」と涙があふれそうになりました。また、月命日の３日を迎えると、感謝の気持ちを直接母に伝えたくなって、悲しくなりました。がんの話を聞いたとき。家族の話を聞いたとき。何度も何度も胸が締めつけられるように苦しくなりました。

中学に入って、クラス全員で作文を書くことになりました。僕は初めて、母のことを書いてみようと思いました。僕は、文章を書くことが苦手でしたが、なぜかスラスラと言葉が出てきました。

作文発表が終わったあと、不思議と心が軽くなったことに気が付きました。これまでフタをしてきた思いを文章にし、気持ちの整理ができたのかもしれません。
「あんなに真面目な蒼天は初めてみた。僕も家族を大事にしようと本気で思う。」
友達からは、こう言われました。今まで、人からふれられることがなかった話題。当然、自分から口に出すことも避けていました。でも、言葉に表したことで、あのとき自分がどう感じていたのか、何が苦しかったのか、少しだけわかったような気がしました。そしてこの話を聞いて、「家族を大切にしたい。」と思える人が一人でも多く増えるなら、僕が感じた思いをできるだけ多くの人に伝えていきたいと思いました。言葉を使うのは、僕もあまり得意ではありません。しかし、心の中にある思いを「言葉」にすることで、何かが変わるのかもしれないと、今は思っています。

家族との会話。いつもの食卓。何気なく過ぎていく毎日は、皆さんが思っている以上に幸せなことです。今、僕の話を最後まで聞いてくださった皆さん。目の前にいる大切な家族とたくさん話をしてください。そして、恥ずかしがらずに感謝の気持ちをつたえてください。伝えられるときに。自分の「言葉」で。当たり前の時間が、いつか大切な思い出となるように。

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

ついでにしているだけ

熊本県　熊本市立鹿南中学校　３年　友枝　紗寧

「ついでにしているだけだよ」１年半程前に他界した大好きだった祖父の口癖でした。

私の家の前に古びた駅があります。周りに店が並んでいるわけではなく、普段は人通りの少ない駅です。しかし、通勤・通学の時間になると、高校生や会社勤めの人で駅はにぎやかになります。駐車場や駐輪場も車や自転車でいっぱいです。にぎやかなのはいいのですが、人が増えるとそれにあわせてごみも増えます。祖父は毎日のように散歩のついでに駅に行き、人が捨てたごみを拾っていました。私はそんな祖父に「どうしてごみ拾いをするの」と聞くと、祖父はいつも「ついでにしているだけだよ」と笑顔で答えました。

ある朝、登校途中の道端に食べ終えたガムが捨てられていました。私は「自分が食べたものくらい自分で捨てればいいのに」と嫌悪感を持ちながら学校へ行きました。夕方になり学校から帰ると、スコップを持ち、しゃがんだ祖父が道にこびりついたガムを取っていました。その姿を見た時、私は正直、祖父がそこまでする必要はないと思い、「どうしてそこまでするの」と祖父に聞きました。祖父はいつものように「ゴミを拾っていたから、そのついでにしているだけだよ」と答えました。祖父は多くのことを語る人ではありませんでしたが、毎日のように散歩のついでにごみ拾いや地域の清掃をする人でした。まだ幼かった私ですが、そんな祖父が大好きで、かっこよく、その姿を見るたびに心が温かくなっていました。

１年ほど前のある日、母の仕事を手伝うために母の職場に出かけた時のことです。母の職場の近くには神社があり、そこにサイクリングに来た男性がお参りをしていました。男性はお参りを済ませると、近くにあった竹ぼうきを持ち、落ち葉を掃き始めました。その光景を目にした時、私は大好きだった祖父の姿が思い浮かびました。いつからか、ごみ拾いをする祖父を当たり前のように見ていた私は、懐かしさで心が温かくなりました。

このことをきっかけに、私は「ついでに自分にできることはないか」「自分が何かをすることで人の役に立てれば」ということを考えるようになりました。トイレに行く時はついでに自分が使ったスリッパ以外も並べる、自分の机や棚を整理する時は欠席している友達の机や棚も整理するなど、祖父が言っていた「ついでに」ということを心がけて生活しています。「ついでに」ということは、正直面倒くさいと感じてしまうこともあります。しかし、そんな時はかっこいい祖父の姿を思い出すようにしています。

最後の中体連大会を間近に控えた６月、私は柔道の練習中に受け身をうまく取れず、左ひじを痛めてしまいました。病院での診断は全治３か月の大けがでした。もう試合に出られない、仲間たちと柔道をすることはないとわかった瞬間、涙が止まりませんでした。学校で落ち込む私をみんなが励ましてくれたり、荷物を持ってくれたりしました。けがをしてみて、これまでは、私は「ついでに」という気持ちで人のために自分ができることを考えてきましたが、このけがを通して、私も周りの友達から支えられ、周りの人から「ついでに」いろんなことをしてもらっていることに気づき、してもらうことの嬉しさとありがたさを感じることができました。中体連大会には出ることはできませんでしたが、人のやさしさと思いやりに触れ、その大切さに気づく機会になりました。

祖父は他界し、今では会うこともできません。しかし、私の心の中にはいつも祖父がいます。祖父は「ついでにしているだけ」といつも言っていましたが、その根底にあるものは周りの人や自分が生活している地域への思いやりと優しさでした。自分の行動で周りの人たちが気持ちよく生活でき、生活する地域がきれいになるならば、そのことがうれしいと思っていたのだと思います。私の周りには私にできることがたくさんあります。私も祖父のように自分の行動で人や地域を幸せにできる人になりたいです。「ついでにしているだけ」という気持ちで。

第 26 回わたしの主張岩手県大会発表文集

令和 6 年 12 月発行
編集　公益社団法人岩手県青少年育成県民会議
〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7 － 1
いわて県民情報交流センター（アイーナ）6 階
電話：019-681-9077　FAX：019-681-9078
ホームページ：http://www.ipayd.server-shared.com /content/

※　転載等の問い合わせは、上記へご連絡ください。